NEWS

都市文化研究センター(UCRC)の全体的な活動とスタッフ

仁木　宏（文学研究科准教授，UCRC 副所長）

2007年4月，都市文化研究センター（Urban-Culture Research Center，以下，センターと略）が新生して以降，センターでは，先端レベルの研究成果を生み出し，大阪市立大学大学院文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にするための活動を展開してきた。

具体的には，文学研究科における共同研究を主導するとともに，文学研究科に関係する大学院生，若手研究者に対して高度な教育・研究支援を行うこと，文学研究科教員に利便性の高い研究支援方策を提供することなどを目的としている。

そのため第一に，大阪市立大学の学内競争的資金の一つである「重点研究」に応募し，研究資金を獲得して多角的，機動的な研究活動を開始した（「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」，平成20～24年度，研究代表者：井上徹教授）。これは，2007年度まで継続していた21世紀COE「都市文化創造のための人文科学的研究」を継続，発展させるもので，近い将来，文学研究科あるいはセンターによるG-COEへの申請の基礎条件を充実させようとする意図をもっている。

大学院学生・ODなど若手研究者に対する支援事業としては，国際発進力育成インターナショナルスクール（IS）を開催し，国際学会における英語での学術発表，国際学会誌への英文投稿などの技術力養成につくした。なお，本事業は，文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」の指定を受けている。また，UCRCドクター研究員制度を継続し（「2008年度ドクター研究員一覧」参照），学位取得の促進，研究環境の整備につとめた。さらに意欲的な研究員には，ドクター研究員プロジェクトによって研究資金を提供するとともに，科学研究費を申請するための技術的アドバイスを行った。なお，ISやドクター研究員制度は文学研究科以外にも門戸を開いており，学内他部局や学外よりの参加者も少なくない。

教員への研究支援策としては，昨年，大きな成果を生んだ，科学研究費申請を後援する事業を今年度も実施した。この他，最新の研究成果を市民に還元する事業として，上方文化講座を継続して開催した。

以上のようなセンターの研究成果を発信するため，文学研究科叢書の刊行に引きつづき努力した。また，若手研究者の発表機会を提供するため雑誌『都市文化研究』を編集・発行した。

■スタッフ

センターの運営にあたる教員スタッフ（コアメンバー）は以下の通りである（昨年度から変更はない。順不同）。

所長：中川眞教授（アジア都市文化学）

副所長（事務局長）：仁木宏准教授（日本史学）

常任研究員：井上徹教授（東洋史学），塚田孝教授（日本史学），水内俊雄教授（地理学），土屋礼子教授（社会学），石田佐恵子教授（社会学），多和田裕司教授（アジア都市文化学），山崎孝史教授（地理学），平田茂樹准教授（東洋史学），久堀裕朗准教授（国文学），森洋久准教授（地理学）

この他，ドクター研究員もスタッフとして研究活動に参加しており，研究履歴となる。

●センター会議の開催

第６回　2007年11月９日
第７回　2007年11月30日
第８回　2008年１月18日
第９回　2008年２月26日
第10回　2008年４月11日
第11回　2008年５月９日
第12回　2008年５月23日
第13回　2008年６月６日
第14回　2008年11月７日

以下，各プロジェクトごとに詳細を記す。

国際発信力育成インターナショナルスクール（IS）

栄原永遠男（文学研究科教授）

2008年４月１日～11月30日の状況について記録する。

４月８日（火）　前期授業開始

・アカデミック・コミュニケーション演習（AC演習）開始（前期：オーラル・プレゼンテーション）。非常勤講師エリザベス・リーElizabeth Leigh氏

４月８日（火）　大学院生向け説明会を開催（於127教室）。集中科目，その発表について，海外派遣支援，トレーニングプログラム（TP）等について説明。

５月21日（水）　IS取組担当者会議において，以下のことを決定。

・IS実践演習を以下の要領で実施すること決定。
主担；山崎孝史，副担；ティム・オークスTim Oakes（コロラド大学准教授）
科目名「人文地理学特殊問題演習3」
講義題目「Globalization, tourism, and modernity in China」

6月25日（水）　IS取組担当者会議において，以下のことを決定。
・ISとG-COE共催のライティング・セミナーにつき，G-COE側で承認される。これにより開催を決定。
講師：崎村耕二（京都工芸繊維大学教授）
講義内容：学術論文執筆法
開催日：2009年3月4～6日（水～金）（7月23日確認）

6月27日（金）13～15時　TP特別セミナーを開催（於田中記念館2階会議室）
カレン・ケルスキーKaren Kelsky氏（イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校准教授，東アジア言語文化学部）「Challenges in Training Asian Students in the U.S. Academic Profession」

7月４日（金）13時30分～15時30分　IS企画セミナーを実施（於128教室）
ジョン・グラントJohn Grant氏（カリフォルニア州立大学チコ校非常勤講師Lecturer, California State Uniresity, Chico）「Learning About American Culture by Examning What Americans Value in Japanese Cinema」

7月から5回，集中科目直前TPを実施。対象は集中科目発表者と国際学会発表予定者。

9月16日（火）IS取組担当者会議において，以下のことを決定。
・AC演習Ⅱ（後期）の担当をエリザベス・リー氏に変更する。
・国際発信力育成のための提携先を，イリノイ大学東アジア言語・文化学部，同東アジア・太平洋学部，チュラロンコン大学学芸学部の2大学3学部にしぼり，大学別に担当チームを作る。なお，この提携は，文学研究科の学術交流の提携先とすることを視野に入れてすすめる。

9月16日（火）13時30分より，集中科目のためのブリーフィングを実施。
於815教室（講義），816教室（通訳ブース）
参加者：神戸女学院大学現代GPスタッフ，文学研究科IS取組担当者，業者スタッフ

15時30分よりFD委員会と打合せ。

16～18時，公開FD研究会。於812教室
ヤン・トルネール「ベルギーにおける大学院教育とFD」
エヴァ・カミンスキー「ポーランドにおける大学院教育とFD」

18時30分から，歓迎レセプション

9月17日（水）　IS集中科目「比較文化交流論Ⅰ」1日目
3日間に発表する9人の大学院生に対して，事前にトレーニング・プログラム（TP）を設定し，シャドーイング，発表原稿の添削，発音指導その他，きめ細かな事前指導を行った。また，準備段階から当日の運営にいたるまで，大学院生をティーチング・アシスタント（TA）として参加させ，国際的な学会の企画・運営に関する知識を身につけさせ，経験させた。
今年も，神戸女学院大学現代GP「通訳トレーニング法を活用した英語教育」との共同事業として実施した。
3日間の内容は，年度内に報告書として刊行する。

午前（講師紹介（英語）：山崎雅人）
・同時通訳（神戸女学院大学）について紹介と説明，注意事項　田中一彦
・あいさつ（英語）　谷富夫文学研究科長
・Eva Kaminski（Associate Professor of Jagiellonian University）
“The European encounters with Japanese art：Germany as a case study”.

午後（担当：荒木映子・三上雅子）
・Yu Ishikawa（The Department of Culture as Representation, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“Yaoi：Fan Art in Japan”.
石川　優（表現文化学専修）
やおい――日本における二次創作の事例研究――
・Natsuki Kawaguchi（The Department of Geography, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“How Street Fashion Is Shaped in Horie, A Commercially Regenerated Area”.
川口夏希（地理学専修）
更新された商業空間にみるストリート・ファッションの生成――大阪市堀江を事例として――
・Yutaka Arita（The Department of French Language and Literature, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“Waldensians : Why were they judged as Heretics ?”.
有田　豊（フランス語フランス文学専修）
ヴァルド派――なぜ彼らは異端となったのか？――

9月18日（木）IS集中科目「比較文化交流論Ⅰ」2日目
午前（講師紹介（英語）：山崎孝史）
・Ian Richards（Associate Professor of Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“New Zealand's Kendrick Smithyman：Tha Move Towards a Posa-Colonial Poetic”.
午後（担当：関茂樹）
・Riichiro Isobe（The Department of Linguistic and Information, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“The Emotional Influences on the Language Development of Younger children：The Experience of the Special Needs Education in a Kindergarten”.
磯部理一郎（言語情報学専修）
幼児の言語発達における情動的影響について――ある幼稚園での特別支援教育の経験から――
・Asami Fujie（The Department of English, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“A Semantic Research on Derived Nominals”.
藤江麻美（英語英米文学専修）
英語の派生名詞句に関する考察
・Genta Miyazaki（The Department of Psychology, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“The costs of relationship loss and reactions to social rejection：Focusing on shared activities with others”.
宮崎弦太（心理学専修）
関係喪失のコストと社会的拒絶への反応性――他者との共有活動に注目して――
9月19日（金）IS集中科目「比較文化交流論Ⅰ」3日目
午前（講師紹介（英語）：田中一彦）
・Jan Tolleneer（Professor of K.U.Leuven University）
“Sport and international relations : a comparative-historical approach”.
午後（担当：田中孝信・田中一彦）
・Kazuhiro Masui（The Department of English, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“Hersey and America : in John Hersey's Hiroshima”.
増井一弘（英語英米文学専修）
ジョン・ハーシーとアメリカ：ジョン・ハーシー『ヒロシマ』（1946）をめぐって
・Maeeda Hiroki（The Department of English, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“Dickens's Idiot in Barnaby Rudge”.
前枝弘樹（英語英米文学専修）
『バーナビー・ラッジ』に見るディケンズの白痴像
・Ayana Katakura（The Department of Western History, Graduate school of Literature and Human Sciences, Osaka City University）
“Challenge to the Throne：the Byzantine Princess Anna Komnene and Conspiracies,1118-1119”.
片倉綾那（西洋史学専修）
ビザンツ皇女アンナ・コムネナによる帝位への挑戦（1118－1119）
10月1日(水）後期授業開始
・IS実践演習「中国の観光・モダニティ・統治性 Tourism, modernity, and governmentality in China」開講。
・AC演習Ⅱ開講（アカデミック・ライティング）。
10月15日(水）　IS取組担当者会議において，以下のことを決定。
・集中科目招聘講師3名のうち2名はチュラロンコン大学とイリノイ大学からとする。
・文学部棟128教室の清音化工事を間接経費で実施する。
11月19日(水）　IS取組担当者会議において，以下のことを決定。
・2009年度集中科目の科目名は「国際都市社会論Ⅱ」とする。日程は9月15～17日にて決定。
・招聘講師3名のうち残り1名は，韓国からとする。
・外国語雑誌への投稿論文についての校閲料を支援する。
・平成20年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」（2009年1月12，13日）に参加する。
・『大学院留学事典2009－2010』（株式会社アルク発行）の企画製作担当（株）ディービー・ワークスからの取材申し込みに応じる。

以上のほか，大学院生等の海外における研究発表の費用支援を行ってきた。11月末現在で13件について支援。

大阪プロジェクト・重点研究（旧年度分）の活動

塚田　孝（文学研究科教授，常任研究員）

2003年度から5年の期間で行なわれてきた重点研究「都市文化創造のための比較史的研究」は，昨年度末（2008年3月）をもって終了した。本研究は，文学研究科のCOEプログラムと密接な関連のもと，その大阪プロジェクトの活動と一体で研究活動を進めてきた。そのためCOEプログラムが終了した2007年度も大阪プロジェクト・重点研究の活動として，総括を主として取り組んだ。

ここでは，第10号に掲載した分（2007年10月まで）以後，重点研究（旧年度分）終了の2008年3月までに行なった活動をまとめておきたい。

研究会活動

①比較都市文化史研究会「地域史の方法をめぐって」（近世大坂研究会と共催）

2007年11月3日（土）13:00～17:00　　文学部会議室

・多和田雅保（飯田市歴史研究所）「再論　近世の上飯田村を知る――羽場地区について――」
・多和田真理子（飯田市歴史研究所）「村の小学校設置から地域を見る――「全体史」への一歩――」
・羽田真也（和泉市史）「地域史研究の視角･方法・意識をめぐって」
・岡本一也（大阪市立大学・大学院学生）「近代地域史研究の方法的模索――大阪府･泉州農村を対象とした研究から考えていること――」

②ミニシンポジウム「最古の万葉仮名文木簡の出土をめぐって」

2007年11月24日（土）13:30～16:30

大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室

講演　毛利正守（武庫川女子大学教授）「難波宮出土の「皮留久佐」木簡と人麻呂歌集と」

報告　佐藤隆（大阪市文化財協会）「木簡出土地点の検討と難波宮周辺整備」
古市晃（花園大学）「7世紀史研究から見た難波宮仮名木簡の意義」

③比較都市文化史研究会（G-COE和泉プラザ，近世大坂研究会と共催）

2008年１月12日（土）14:30～17:00

大阪歴史博物館第2会議室

・山下聡一（G-COE特別研究員）「近世大坂生玉神社における社職集団について」

④国際シンポジウム「東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策」（特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成――寧波を焦点とする学際的創生」文献資料研究部門と共催）

2008年２月３日（日）9:00～17:30

大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室

・曹家斉（中山大学）「宋代の交通と対外政策」
　コメント　山崎覚士（大阪市立大学）
・矢澤 知行（愛媛大学）「元代の水運・海運と両浙社会」
　コメント　森田健司（奈良大学）
・井上　徹（大阪市立大学）「明朝の対外政策と両広社会」
　コメント　甘利弘樹（大分大学）
・陳春声（中山大学）「明清之際的潮州海商及其在寧波周囲港口的活動」
　コメント　山崎岳（京都大学人文科学研究所）
・劉志偉（中山大学）「鴉片戦争前後的寧波与広州――以葉名琛档案為中心」
　コメント　中島楽章（九州大学）

＜東アジア海域交流の観点より＞

・荷見守義（弘前大学）「明代東アジア海域の国際交流――江南 - 遼東 - 朝鮮（高麗）」
・渡辺美季（東京大学）「琉球における対異国船漂着体制」
・六反田豊（東京大学）「朝鮮半島における不審船の接近への地方官の対応について――『東萊府啓録』を素材にして――」

報告書などの刊行

①『都市文化創造のための比較史的研究（重点研究報告書）』（2008年3月刊行）

重点研究5ヵ年の総括の報告書。2007年10月13日に開催された重点研究「都市文化創造のための比較史的研究」総括シンポジウムと11月24日に開催されたミニシンポジウム「最古の万葉仮名文木簡の出土をめぐって」の内容をもとに，関連する論考と活動記録を収録した報告書。

②『大阪歴史博物館所蔵明暦元年大坂三郷町絵図』（2008年3月刊行）

17世紀半ばの大坂の都市社会と空間を考える上での基本史料たる大阪歴史博物館所蔵の「明暦元年大坂三郷町絵図を」のカラー印刷による刊行。

大阪・重点運営会議

以上のような研究活動を実施するために行われた大阪・重点運営会議は以下の通りである。

第36回　2007年11月16日（金）10:00～11:00
第37回　2007年12月21日（金）10:00～11:00
第38回　2008年１月25日（金）10:00～11:00
第39回　2008年２月21日（木）10:00～11:00
第40回　2008年３月20日（木）10:00～11:00
第41回　2008年４月10日（木）16:30～17:30

重点研究（新規採択分）の活動

井上　徹（文学研究科教授，常任研究員）

都市文化研究センターでは，平成20年度の重点研究に応募するために，検討会議を設けて検討を進めた。メンバーは，中川眞，仁木宏，塚田孝，土屋礼子，多和田裕司の各教員，及び谷富夫研究科長，井上徹。第1回会議は2008年3月19日に開き，以下，5月2日，5月23日，5月28日，5月30日に申請書作成のための作業を行った。またG-COEとの連携を視野に入れて，都市研究プラザの水内俊雄教授と協議を行った（3月24日）。この間，4月11日の都市文化研究センターの会議で，研究計画を提示し，意見を聴取した。

以上の準備を経てとりまとめた「平成20年度重点研究申請書」を6月4日，研究支援課に提出した。採択の通知（7月1日付け）が届いた。2008年度の交付額は4,100,000円である。なお，重点研究のメンバーは次の通りである。

代表：井上徹

共同研究者：谷富夫，大黒俊二，塚田孝，早瀬晋三，松浦恆雄，土屋礼子，平田茂樹，多和田裕司，仁木宏，岸本直文，久堀裕朗

以下，本重点研究の概要を紹介しておきたい。

1　研究概要

［プログラム名称］「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」

［研究プログラムの目的，特色，重要性］

⑴　目的

本研究は文学研究科都市文化研究センターが中心となって，21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の研究成果を継承し，かつG-COE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」と連携しつつ，アジア海域の都市の文化力を考察しようとするものである。

アジア海域の都市の文化力を本研究のテーマとして掲げたのは，グローバル化に直面する現代の諸都市が抱える諸問題と密接な関わりがある。西洋に起源するグローバル化は負の側面としてさまざまなレベルにおける中心と周縁の格差を生み出し，この格差の構造あるがゆえに，非西洋の長い伝統をもつアジアではグローバル化に抗しようという意識が濃淡はあれ，たえず表面化してきた。工業生産力による物的社会発展の段階を経て，都市が知的に成熟してきた現在，グローバル化に抗するに際して，大きな威力を発揮するのは長い時間をかけて創りあげてきた伝統文化である。グローバル化と伝統文化との関係を考察するうえで，巨視的な地理空間として，アジア海域を対象とする。この海域世界は歴史的に密接な関係を保ってきた経験をもち，グローバル化の潮流が押し寄せた時，大阪を始めとするアジア海域の諸都市こそがその影響を直接的に蒙った。大阪を中心とするアジア海域の諸都市が培ってきた文化力とその長期持続性を検証し，グローバル化のなかでの都市の再生・発展に研究成果を生かすことを本研究の目的としたい。

本研究によって得られた成果をもとに，次期「グローバルCOEプログラム」への応募を予定している。

⑵　特色

アジア海域の都市の文化力を考察するうえで，立脚点は本学が所在する大阪に置きたい。大阪は現代に至るまで日本の中心的ステータスを争ってきたが，現代のグローバル化の潮流のなかでそのステータスを今後も維持するには，「文化を育む都市」を確立することが重要な課題となる。大阪は歴史的にアジア海域の諸地域・諸都市との関係が深く，様々なネットワークを利用しながら，海外のモノやヒトを導入し，独自の社会を創出する道を歩んできた。大阪の歴史を縦軸とし，その他のアジア海域諸都市を横軸として設定し，相互の国際交流のなかでグローバル化に対応する都市の文化力がどのように形成され，長期にわたって維持されてきたのかを解明し，現代における新たな都市文化創造の起点とすることに本研究の特色がある。COE事業が上げた多様な成果を基盤としつつ，グローバル化と伝統文化の威力を焦点とすることにより，都市文化理論の軸を提示することができる。

⑶　重要性

・これまでに，都市大阪，海域アジア，アジア諸都市を個別に取り上げて検討する研究は相当に蓄積されてきたが，大阪を焦点とするアジア海域のネットワークのなかでアジア海域諸都市の文化力の長期持続性を設定する構想はほとんど見られない。本研究によって都市文化史に関する理論的成果を得ることが可能となる。

・都市文化に関する充実した研究教育拠点を維持し，継続的に研究教育を進めることは，大阪市に立地する大学の社会的使命という観点からも，また本学の国際的な評価を高めるという観点からも，大きな意義がある。

［研究内容］

⑴　都市の文化力に関する段階的・総体的考察

大阪を立脚点としてアジア海域の諸都市の文化力を歴史的に考察するうえで，COEの研究成果を集約して，グローバル化を念頭に置いた次の3つの都市文化の歴史的段階を構想している。

第1に，都市文化の形成と変容の段階。16～17世紀の大航海時代を中心として，アジア海域を緩やかに結ぶ朝貢秩序のもとで，倭寇や華人のネットワークの台頭に

ヨーロッパ勢力の進出も加わる。海域世界が流動化するなかで，アジア海域の諸都市で古代以来各地に形成され，培われてきた文化の伝統が変容する。

第2に，都市文化の成熟の段階。17～19世紀半ばの時期，朝貢秩序が再構築される一方，日本，中国，朝鮮，東南アジアなど海域諸国の政治体制が固まるなかで，現在「伝統」とみなされている都市の文化的伝統が形作られ，成熟した。

第3に，グローバル化のなかでの都市文化の段階。朝貢秩序が動揺・崩壊する19世紀から現代に至る時期，グローバル化への文化的抵抗のプロセスで各地の文化的伝統が活用された。文化的抵抗の根源にはグローバル化がもたらした格差の構造がある。あらゆるレベルにおける弱者の動向が文化的抵抗への原動力となっていることに留意したい。

本研究は3段階の歴史を考察するに際して，下記の局面を自覚的に検討する。第1に，大阪，神戸，長崎，下関，厳原（対馬），那覇，上海，香港，広州，プサン，インチョン，ジョグジャカルタ，マラッカ，ペナンなどを調査対象都市とし，各都市間のネットワークの状況を明らかにする。第2に，衛星写真，航空写真と古地図との対照により現代の都市空間を創出するうえで母体となった伝統的な空間構造を復元する。第3に，民族や宗教，経済的・政治的ステータスなどの要素を考慮して，諸地域・諸都市固有の社会関係と格差の状況を掘り起こし，格差の状況がどのように政治的，社会的，文化的に解決されたのかに留意する。第4に，文芸（とくに演劇，メディア），思想，宗教など多様な要素に考察を加えて，各地域の人々のアイデンティティの有り様を探る。第5に，都市の文化装置（宗教施設，劇場，学校，商業センター，慈善施設など）に対する考察を重視する。

以上の検討を踏まえて，各地域がグローバル化に対応するに際しての母体となった都市文化の長期存続の構造を解明し，新たな都市史理論を構築し，それらの成果を「文化を育む都市」大阪を築くために必要な研究にフィードバックする。また，アジア海域諸都市の比較研究によって，「アジアのなかの大阪」の位置づけを明確にし，大阪の近未来像を構築するために，過去の文化形成の経験や文化遺産を整理・分析して，それらの一体的な再構築をはかる。

本研究プロジェクトのメンバーは都市文化に関する各研究を深化させるとともに，海外研究者との個別ネットワークを通して，その成果を全体のプロジェクトに還元させる仕組みを構築する。

⑵ 都市文化研究のための基盤整備

①都市文化研究センターでは大阪を中心とするアジアの都市関係のデータベースを構築し，公開している。アジア海域の都市文化に関わる資料を網羅的に収集し，分類・整理のうえ，デジタル化して，データベースを充実させる。

②G-COEプログラムと連携しつつ，海外のサブセンター（上海，北京，香港，バンコク，ジョグジャカルタ）を活用して，都市文化に関わる国際的な共同研究を推進する。

③G-COEプログラム，海外サブセンターとの共同事業を通じて，国際的な拠点としての都市文化研究センターの機能をさらに充実させ，次期G-COEに申請できる環境を整える。

⑶ 若手研究者の育成

都市文化研究センター研究員などの参加を募り，本プログラム研究担当者との共同研究・研究交流を通して，若手研究者を育成する。

2 研究計画の実施

本研究の採択後，7月2日（第1回），7月28日（第2回），9月11日（第3回），10月10日（第4回），11月7 日（第5回），計5回の運営会議を開催し，研究計画の実施を検討した。検討内容は次の通りである。

⑴ 運営体制

代表：井上（徹）　副代表：土屋（礼）
研究会担当：塚田
事務局長：多和田　　事務局：岸本，久堀
外部評価委員：岸本美緒（お茶の水女子大学）

⑵ 予算案

アーカイブ用支出	50万円
国際シンポジウム開催	150万円
報告書作成	40万円
外部評価委員委嘱	10万円
ホームページ作成費用	5万円
個別企画支援及びその他	155万円
合計	410万円

⑶ 研究企画

＜個別企画＞

早瀬晋三　イギリス東インド会社マカッサル商館文書翻刻
松浦恆雄　20世紀中国演劇史における戯単・特刊の基礎的研究
久堀裕朗　「上方文化講座2008義経千本桜」書籍化のための準備作業
井上　徹　中国都市の水路ネットワークと文化拠点に関する比較史的研究
土屋礼子　昭和初期大阪の都市文化としての広告メディア研究：『ホームライフ』を中心に
塚田　孝　近世大阪・近代大阪の法と社会についての研究，および海外連携研究者とのネットワーク

作り

＜国際シンポジウム企画＞

本重点研究では，全体企画として，国際シンポジウムの開催を計画している。ワーキンググループ（土屋，松浦，仁木）で提示された案は次の通りである。

日時：2009年3月17日 （火）

会場：大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室

全体テーマ：「往来する都市文化――《断片》から探るアジアのネットワーク」

セッションのテーマ案

第1セッション（担当　仁木）「16世紀東アジア海域の往来――港町を結ぶモノと文化」

第2セッション（担当　松浦）「都市・表象される文化創造の場――台湾におけるモダニテイーの形成をめぐって」

第3セッション（担当　土屋）「アジアにおける都市文化としての広告」

3　研究会活動

①シンポジウム「身分的周縁の比較類型論――近世都市の法と社会――」

日時：2008年９月6日(土）・7日（日）

会場：大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室

主催：近世大坂研究会・ぐるーぷとらっど3・大阪市立大学G-COE都市論ユニット・大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター（重点研究）

９月6日「モノの流通と諸社会集団」 時間 13：00～17：00

塚田孝（大阪市立大学）「身分的周縁の比較類型論――近世大坂の法と社会――」

原直史（新潟大学）「近世大坂における塩干魚・鰹節流通と仲間」

八木滋（大阪歴史博物館）「近世大坂の川魚市場」

９月7日「乞食・勧進層の形成する社会集団」 時間 10：00～17：00

マーレン・エーラス（プリンストン大学／大阪市立大学客員研究員）「越前大野城下の御救い」

藤本清二郎（和歌山大学）「城下町世界の勧進者――和歌山の場合――」

吉田ゆり子（東京外国語大学）「信州下伊那地域における身分的周縁――飯田藩牢守と諸集団との関係――」

三田智子（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）「泉州南王子村の雪踏」

②比較都市文化史研究会

日時：2008年９月28日（日）　13:30～17:00

会場：大阪市立大学第2会議室

報告：村上司樹（大阪市立大学G-COE特別研究員）「中世ウルジェイの教会と都市　スペイン北東部ピレネーの事例」

コメント：大黒俊二（大阪市立大学大学院文学研究科）

主催：GCOE都市論ユニット・都市文化研究センター（重点研究）

③比較都市文化史研究会　「中国都市関連論文の書評会」

日時　2008年10月4日（土）　14:00～17:30

会場：大阪市立大学文学部棟236室

主催：都市文化研究センター（重点研究）・中国近世近代史研究会

［担当者と論文］

山崎覚士（大阪市立大学特任講師）：中村圭爾「魏晋南北朝的城市与官人」（『中日学者論中国古代城市社会』三秦出版社）

室山留美子（都市文化研究センター研究員）「北朝時期漢族官僚在首都居住的情況」（『中日学者論中国古代城市社会』三秦出版社）

村井恭子（都市文化研究センター研究員）「唐代辺境防衛城市幽州」（『中日学者論中国古代城市社会』三秦出版社）

山木篤（関西学院大学院生）：范金民「明代の政治変遷下における南京経済」（『＜アジア遊学78＞中国都市の時空世界』）

尾崎俊文（大谷大学院生）：韓茂莉「簡述明清時期北京城市地理研究」（『中日古代城市研究』中国社会科学出版社）

白井順（都市文化研究センター研究員）：井上徹「明清時期法令的伝達」（『中日学者論中国古代城市社会』三秦出版社）

勝田浩史（大阪市立大学院生）：定宜庄「有関近年中国明清与近代城市史研究的幾個問題」（『中日古代城市研究』三秦出版社）

尾崎敬子（大阪市立大学院生）：吉澤誠一郎「近代天津における廟会の変遷」「明代の政治変遷下における南京経済」（『＜アジア遊学78＞中国都市の時空世界』）

④比較都市文化史研究会 「中国の古文書解析と都市研究」

日時：2008年10月21日（火）　15：30－18：00

会場：大阪市立大学学術情報総合センターグループ学習4号室

主催：都市文化研究センター（重点研究）

協賛：特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成――寧波を焦点とする学際的創生」文献資料研究部門

発表1　卜憲群（中国社会科学院歴史研究所研究員）
「湘西里耶秦簡与秦代歴史研究」
発表2　楼勁（中国社会科学院歴史研究所研究員）
「『周礼』与中古都城格局」

上方文化講座2008〈義経千本桜〉

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

2008年度の上方文化講座は，昨年度の『菅原伝授手習鑑』に引き続き，三大名作の一つ『義経千本桜』に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として，竹本津駒大夫，鶴澤清介，桐竹勘十郎の三師を迎え，文学研究科教員とともに，８月27日から29日までの3日間（連日9:30～16:00），大阪市立大学学術情報総合センター大会議室を会場にして，人形浄瑠璃文楽や『義経千本桜』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募多数の中から抽選で選ばれた一般市民約100名と，学生約50名が受講。授業内容は以下の通り。

８月27日（水）
Ⅰ　時代浄瑠璃の魅力（久堀裕朗・大阪市立大学）
Ⅱ　『義経千本桜』解説（久堀裕朗）
Ⅲ　狐伝承の系譜（小林直樹・大阪市立大学）
Ⅳ　吉野山夢幻（村田正博・大阪市立大学）

８月28日（木）
Ⅰ　『義経千本桜』〔四段目〕講読（久堀裕朗）
Ⅱ　浄瑠璃の言語（丹羽哲也・大阪市立大学）
Ⅲ　『義経千本桜』――語りと人形演出①（竹本津駒大夫・鶴澤清介）
Ⅳ　『義経千本桜』――語りと人形演出②（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

８月29日（金）
Ⅰ　中国演劇における道行（松浦恆雄・大阪市立大学）
Ⅱ　近世大坂の芝居町（塚田孝・大阪市立大学）
Ⅲ　桐竹勘十郎師に聞く――実演をまじえて（桐竹勘十郎）
Ⅳ　文楽の至芸――太夫・三味線・人形，三業一体の舞台再現（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

アーカイブス事業

森　洋久（文学研究科准教授，常任研究員）

大阪市立大学都市文化研究センターの研究範囲は世界中，多岐にわたっており，対応する地図を収集することはかなり困難を極めている。特に，中国，東南アジア等はいろいろな理由により地図が手に入らない場合が多い。そのような地域の救世主として衛星写真は有効である。現在世界の衛星写真を収集しベースマップとして使う計画を進めている。GLOBALBASEプロジェクトではNASA, NOAAの1km, 150mメッシュの衛星写真をもとに研究室内での配信実験を行い，現在ではその成果をもとに，さらに細かいGeosage28.5mメッシュの公開に成功した。

上記衛星写真の他に，大阪兵庫にかけて，Iconosの60mメッシュ衛星写真（京都市埋蔵文化財研究所）。京都に10cmメッシュ航空写真（国際日本文化研究センター／京都市埋蔵文化財研究所），大阪市中心部に，昭和17年航空写真（大阪市／大阪市立大学），大阪城周辺航空写真（大阪市／大阪市立大学）などを重ね合わせることが出来る。GLOBALBASEでの閲覧では，このように地域にある検索条件にある情報をビジュアルに検索してくるところが特徴である。

このうち昭和17年航空写真（大阪市／大阪市立大学）は，大阪の空襲前の市街の様子が残されており貴重な航空写真と言える。これは，文学部地理学教室における地図学，地理情報論等の授業に参加した学生たちが，数百枚の航空写真を3年がかりで張り合わせ，作り上げた労作である。張り合わせの方法は完全なオルソ画像ではなく，現在の地図との対応点を取り，その点を利用したTIN（Triangle Interpration Network）を構成し，各三角形の中を一次変換を使い幾何補正したものである。いわば疑似オルソ画像といえる。

文学研究科叢書編集委員会

山崎雅人（文学研究科准教授）

2008年度（第7期委員）の決定

・中川　眞（UCRC所長，文学研究科教授，アジア都市文化学）
・塚田　孝（UCRC常任研究員，文学研究科教授，日本史学）
・森　洋久（UCRC常任研究員，文学研究科准教授，地

理学）
・山野正彦（文学研究科教授，地理学）
・山崎雅人（文学研究科准教授，言語情報学）

叢書第6巻の企画について

2006年９月30日・10月1日に開催された国際シンポジウム「文化遺産と都市文化政策」の成果を取りまとめると共に，関連分野より広く論考を蒐集して刊行する予定である。

書名：『文化遺産と都市文化政策』
編者：大阪市立大学都市文化研究センター（編集責任者・山野正彦）
出版社：清文堂

第1回委員会　2008年5月16日
叢書第6巻の企画について
第2回委員会　2008年10月17日
第6巻用原稿の蒐集状況について

『都市文化研究』編集委員会

平田茂樹（文学研究科准教授，常任研究員）

今年度より，従来の投稿資格者に加えて，客員教授（客員准教授，客員研究員を含む），特任教員ならびに非常勤講師についても投稿を認めることにした（詳しくは新しい投稿規定参照のこと）。また，投稿に当たっては事前にエントリーを義務づけ，投稿者に原稿作成の自覚を促すこととした。

科学研究費申請を支援する事業

仁木　宏

文学研究科教員の研究条件向上のための方策の一つとして，文部科学省・日本学術振興会の科学研究費補助金申請を支援する事業を昨年度からはじめた。その結果，昨年秋の，文学研究科教員からの科研費申請件数が飛躍的に増加し，本年春に判明した採択数も倍増した。本年度も同事業を継続した。

科学研究費補助金申請アドバイスの会（教員向け）

日時　　2008年9月18日（木）　17:30～18:30
会場　　文学部会議室

近年，科学研究費の採否にかかわる審査員をつとめた経験がある，文学研究科関係教員2名から，申請書作成のポイント，審査基準の内容などについて，有益なアドバイスをいただいた。

ついで大阪市立大学研究支援課主催の「科学研究費補助金申請セミナー」（９月19日）が開催されたので出席し，情報収集につとめた。

今年度はさらに，UCRCのドクター研究員などにも科研費申請の便宜をはかるため，対策講座を実施した。

文学研究科若手研究者のための科研費申請対策講座2008

日時　　2008年10月8日（水）　18:00～19:00
会場　　文学部会議室

文学研究科関係教員より，申請書作成の注意点，審査の実態などについてアドバイスがなされた。

ドクター研究員による研究プロジェクト

仁木　宏

昨年度より，すべての研究員に研究費の支給をすることができなくなったため，希望する研究員から公募申請をうけつけ，すぐれたプロジェクトに資金援助することで若手研究者の研究支援を行っている。

2007年度は，2次にわたって公募を実施し，下表の7件が採択され，研究活動を行った。予算は，文学研究科長裁量経費や重点研究より支援を得，100,000円を上限に支給した。この金額で足りない研究資金（外国旅費など）は自己負担してもらった。

それぞれのプロジェクトは，特定のドクター研究員が研究代表者となり，それ以外に，別のドクター研究員やOD・大学院学生などを研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置したが，プロジェクトの遂行はあくまでドクター研究員によるものとした。

それぞれのプロジェクトの内容，成果については，別掲の報告（成果報告）を参照されたい。

表　2007年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テ　ー　マ	ドクター研究員	担当教員
1	ルクセンブルク共通語（コイネー）研究	田原　憲和	神竹　道士
2	3世紀から7世紀の中国辺境都市における行政文書――吐魯番文書の動態的類型分析から――	穴澤　彰子	井上　　徹
3	映像都市研究の構築に向けて――学際的共同研究による映像実践を通じて――	新井　一寛★ 松田いりあ 梁　　仁實	石田佐恵子
4	教育困難校に挑む教師のアクションリサーチ研究	深見　俊崇 廣瀬　真琴★	添田　晴雄
5	鈴木健一氏『古典詩歌入門』書評会	足立　匡敏★ 根来　麻子	村田　正博
6	富山太佳夫氏を迎えての勉強会	村上　ゆり	荒木　映子
7	清末浙東における知識人の読書空間	王　　標	山口　**久和**

注）複数のドクター研究員によるプロジェクトについては，★マークが研究代表者

2008年度も，2次にわたって公募をおこない，下表の12件が採択され，研究活動を開始した。予算・体制などは2007年度と同様である。それぞれのプロジェクトの内容，成果については，別掲の報告（中間報告）を参照されたい。

表　2008年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テ　ー　マ	ドクター研究員	指導教員
1	「日本語日本文学研究と情報化」研究会	足立　匡敏★ 高重　久美	村田　正博
2	文化的秩序の再建と都市景観の形成――中国知識人社会と地域名勝の相互作用――	王　　**標**★	山口　久和
3	東アジアと日本古代都城をつなぐ道を探る　――外国使節の迎接道――	竹本　　**晃**★	栄原永遠男
4	ルクセンブルク語コイネー（共通語）研究会	田原　憲和★	神竹　**道士**
5	都市部の小学校における福祉教育実践過程の検証――教師に対するインタビュー調査から――	広瀬美千代★	湯浅　恭正
6	戦国期畿内政治史および都市史を再**検討**するための軍記資料『細川両家記』研究	古野　　**貢**★ 村井　**良介**	仁木　　**宏**
7	現代都市とファッション文化のコンタクト／コネクト	松田いりあ★ 梁　　**仁實** 佐野　明子 川口　夏希	石田佐恵子
8	大阪市阿倍野地区における新しい都市空間創出に関する連続的オープンフォーラム計画	川口　夏希★	大場　**茂明**
9	マイノリティとされる人々の「語り」から見る「場所」の記憶――和泉市幸地区に居住する在日コリアン高齢者の体験と語りから――	柴田　　**剛**★	水内　**俊雄**
10	近世都市史研究の方法を学ぶラウンドテーブル	山崎　竜洋★	塚田　　**孝**
11	東アジアにおける薛瑄『讀書録』の読まれ方	白井　　**順**★	山口　**久和**
12	戦間期における地域社会とマス・メディアの軍縮言説の構造――『呉新聞』の内容分析を事例に――	中嶋　晋平★	土屋　**礼子**

注）複数のドクター研究員によるプロジェクトについては，★マークが研究代表者

2007年度ドクター研究員プロジェクト成果報告

1．田原憲和「ルクセンブルク共通語（コイネー）研究」

研究協力者：小川敦（ルクセンブルク国立研究所客員研究員，一橋大学），木戸紗織（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

2007年度の本プロジェクトでは，以下の日程で5度にわたり勉強会ならびに研究会を行った。

第1回　2007年6月19日　於:麗澤大学319教室（参加者4名）

第2回　2007年8月11日　於：ルクセンブルク市内フィールドワーク・ルクセンブルク国立図書館会議室（参加者3名）

第3回　2007年10月13日　於：大阪市立大学文化交流センター（参加者5名）

第4回　2007年12月22日　於：大阪市立大学高原記念館（参加者6名）

第5回　2008年2月17日　於：大阪市立大学文学部棟401号室（参加者6名）

第1回は他の学会の研究発表会に合わせ，会場校の教室の提供を受ける形で顔合わせを兼ねた勉強会を行った。第2回はルクセンブルク国立図書館のLuc Deitz博士の助言をもとに，ルクセンブルク市内の言語調査，とりわけ，ドイツ語とルクセンブルク語の使用領域に関する調査を行った。

第3回から第5回は，大阪市立大学大学院文学研究科独文専攻大学院生らも加わり，「ルクセンブルク共通語（コイネー）研究会」としてそれぞれの研究に関する報告会を行った。全体を通じ，主に以下の三点について報告が行われた。なお，カッコ内は話題提供者である。

⑴「ルクセンブルク人における三言語併用とアイデンティティ形成の相関関係」（木戸）

要旨：ルクセンブルクの教育現場ならびに社会において三言語併用が実践されている。ルクセンブルクは国際語であるフランス語とドイツ語を公用語としながらも，ルクセンブルク語にも同じ公用語としての，さらに国語としての地位をも与えている。

欧州統計調査資料によると，他のEU諸国と比較して飛び抜けてヨーロッパ人意識が高いというデータのあるルクセンブルク人であるが，EUとの深い繋がりやフランス語，ドイツ語という国際語と通ずるグローバルなアイデンティティが存在する一方で，ルクセンブルク語というローカルなアイデンティティも高まりつつある。というのも，ルクセンブルク国民の約半数は外国出身者で

あり，とりわけ，ルクセンブルク市においては，昼間人口の約 60%を外国人が占めるという超国際都市だということがある。またそれに伴い，ルクセンブルク語を母語としない子ども達も多く，外国人が半分以上を占める学校もある。

そのため，ルクセンブルク語が元来のルクセンブルク人と新しいルクセンブルク人に共通なローカルなアイデンティティとして機能している。ルクセンブルクにおける三言語併用を通じてのアイデンティティのグローバル化とローカル化は表裏一体の関係であり，これがルクセンブルク人としてのアイデンティティを形成する重要な要因であるといえる。

⑵「ルクセンブルク語正書法にみる言語意識」（田原）

要旨：ルクセンブルク語正書法は 1854 年にマイヤーによって書かれたいわゆる『小誌』によって初めて示された。またその翌年の 1855 年にはフォンテーヌによってもいわゆる『試論』が出された。フォンテーヌは『試論』において激しくマイヤーを批判したが，その背景には両者の思想的隔たりがあった。愛国主義を貫いたフォンテーヌは首都方言を自らの正書法と文学作品によって地方に広めるのに重要な役割を担っていた。

20 世紀に入ってから数度にわたり出された公的な正書法は，それぞれ政治的背景を有していた。とりわけ，第二次大戦直後に出されたフェルテスの正書法では，ドイツとドイツ語への嫌悪感から，ドイツ語色を一掃した英語風の綴りが採用されるに至った。しかし，ルクセンブルク国民にとってのドイツ語は最も読み書きが容易な言語であり，一種の必要悪であった。そのため，ルクセンブルク語については，取りたてて学ばなくてもドイツ語からの類推である程度の読み書きができる程度の正書法が求められていた。20 世紀に入ってからのルクセンブルク語正書法は，純粋に言語的な問題としてではなく，政治的な問題となることが多かった。

⑶「第二次世界大戦後ルクセンブルクにおけるルクセンブルク語とルクセンブルク人意識」（小川）

要旨：ルクセンブルクにおける言語意識の問題は，母語意識と外国語使用の意識の問題であった。ルクセンブルク語に基盤を置きつつ，しかしそれに極度に偏ることなく，ドイツ語やフランス語の使用が優先されてきた。現在のルクセンブルクにおいては「国民国家」とは何か，どうあるべきかという議論がたびたびわき起こる。EU 統合の象徴として「模範的なヨーロッパ人」と表象されてきたルクセンブルク人のアイデンティティが今後どのような方向に推移するかは未知数である。

得られた成果

本プロジェクトにより，国内のルクセンブルク研究者らと横の繋がりを作り出すことに成功した。これまで各研究者が個人で行っていた研究をそれぞれ異なった点から再検証し，研究のさらなる発展につなげることができた。

また，本研究プロジェクトのメンバーを中心に，上智大学副学長であるジャン・クロード・オロリッシュ氏，愛知教育大学教授の田村建一氏を加え，2008 年度に『ルクセンブルクの言語文化と言語意識』というテーマでシンポジウムを行うことになった（共催：京都ドイツ語学研究会）。ルクセンブルク関連のシンポジウムが開催されるということは世界的にも稀であり，本シンポジウムについてはルクセンブルクを初めとする研究者に注目されている。さらに，この『ルクセンブルクの言語文化と言語意識』シンポジウムの成果報告を兼ねたルクセンブルク関連の論文集を上智大学出版会の支援を受けて出版する計画が持ち上がっている。

シンポジウムならびに論文集の出版と並行し，オロリッシュ氏をオブザーバー，田村氏を研究代表者とする研究プロジェクトも立ち上げられた。これには，シンポジウムのメンバーに加え，北海道大学大学院生の西出佳代氏も参加しており，グループによる共同研究を進めている。この共同研究を核として 2009 年度の科学研究費助成に申請中である。

このように，本プロジェクト開催をきっかけとして，これには直接関わっていなかった他の研究者を巻き込んだ大きな研究の流れが創られつつある。これは，個々人が残した研究成果以上に重要かつ貴重な成果であると思われる。

２．穴澤彰子「3 世紀から 7 世紀の中国辺境都市における行政文書――吐魯番文書の動態的類型分析から――」

研究協力者：室山留美子（UCRC ドクター研究員）

※本研究をもとに執筆した論文は，2008 年 6 月 21 日（土）に宋代史談話会において発表（於大阪市立大学法学部棟 711A）し，『都市文化研究』11 号（本誌）に掲載されている。

中国史においては，墓誌や竹簡なども含めた出土文字資料研究全体における近年の一つの動向として，書写（刻字）された文字の示す内容だけにとらわれず，古文書学的視点や，あるいは文物資料そのものとしての形態や出土状況といった考古学的アプローチから，文字資料全体を捉え直す必要性が指摘されている。このうち西晉から唐代の墓葬から出土した一群の吐魯番文書については，これまで精度の高い研究が蓄積されてきたことは周知の通りであるが，その発掘調査報告書の不備から出土状況自体の情報がほとんど得られず，こうした視点からの考察はもとより困難を伴っていた。

しかし近年には過去の調査報告が再度詳細な形でまとめ直され，吐魯番文書をその出土状況とともに総合的に考察できる状況がある程度整いつつある。日本において

も荒川正晴・關尾史郎氏らが，文書の形状および出土情況について詳細な調査を行い，古文書学的視点から再検証を試みている。また，最近『新獲吐魯番出土文書』（中華書局，2008年）が刊行され，そこには新出の吐魯番出土文書が多数収録されており，この成果は注目に値するものである。

今回の研究は，このような文書資料研究の視点に立ち，吐魯番北涼文書に見られる両面利用文書と，文書の埋納過程を手がかりとして，公文書の具体的な流れを捉えることを目的とする。

この両面利用文書は，表が文書として使われ，その効力・機能が失効したのちに裏面が二次利用され，さらにそれも文書としての効力を失った後，廃棄されて，最終的には墓葬内の埋葬品として利用されたことを示す。このような両面利用文書を検討することから，北涼時期における文書の作成・利用・保存・廃棄という一連の流れをみることが可能であると考える。また，最終的に文書が墓に埋納されたという事実は，それまで現実の世界で再利用されながら様々な役割を担っていたと考えられる文書が，ある意味において最終地点に達し，そこからさらに異なる用途に変化したことを示すのであり，公文書の最終的破棄の場として，墓主と文書の関係を検証した。

吐魯番北涼文書の流れと廃棄の形態

1980年代以前の研究においては，文書中の文言から当該地域・時代の政治状況や国際関係を解明したもの，さらには土地制度･租佃関係など社会経済史や軍事制度，官僚制度など制度史の観点から文書にアプローチした研究が主であったが，1980年代以降，祝総斌氏，中村圭爾氏，關尾史郎氏らによって，署名や文書形式，文書と被葬者との係わりなど，文書そのものに焦点を当てた研究が精力的に行われた。第一部では，このような諸先学の成果を受け継ぎつつ，文書が官府間や人との間で如何なる動きを取り，保存，破棄されたのかという吐魯番文書の動態的側面に注目して分析を進めた。

吐魯番文書の表裏については，機能からおおよそ次の4つに分類した。すなわち A:両面が「情報伝達の文書」，B：片面が「情報伝達の文書」で，もう片面が帳面や戸籍などの「情報を保存する文書」，C：片面が公文書として機能し，もう片面は草稿などの文書，D：片面が公文書，もう片面が私文書，である。それぞれについて分析を行い，以下の結論を得た。

表面を利用した一次文書と，その文書が効力を失った後にもう片面が利用される二次文書とは，宛所や作成官府などの点で関係しているものが多い。また，吐魯番出土文書の最終的な廃棄地点はそのほとんどが官府からであり，しかも，官府ごと，その中でもテーマごとにまとまって出土していることが多いことを明らかにした。公文書がほとんどで，私文書が極端に少ない吐魯番の出土形態は，副葬品の材料としての文書の主な供給元が官府であることを示すと考えられる。

文書の保存方法については，中原地域と同じく紙を貼り継いで保存したと思われるものがある。また国家の重要な官吏の任命・官吏採用試験に関する文書の一部は，数十年にわたって保存されており，北涼政権においても長期保存の文書とそれ以外の文書に区別する基準がすでに成立していた可能性もあるとした。一方，長期保存対象外の文書の中には，時を置かずして二次利用・廃棄に回されているものも多く，これにはトルファン地域の紙の絶対的な不足という事情が絡んでいるのであろう。ただ，一枚物の草稿，もしくは正式書面における表裏使用など，紙の使用方法には様々なケースがあり，それらには如何なる区別があったのかが，今後の検討課題となった。

また，辞など民からの上行文書を含む場合，役所が反故紙を提供した余地もあると論じたが，その場合，文章は誰が記したのか，また徭役につく人々が文字を書き，文章を作成できたのか，あるいは官府などの官吏が代理で作成したのか等の残された疑問について，文書作成を通じた官吏と民衆との関わり合いを解明するなど，社会史的なアプローチからの視角もこれからは必要であると考える。

埋葬品としてみた吐魯番北涼出土文書

第一部に述べたような現実の世界の文書としての機能・役割が完全に終了するのは，吐魯番文書群が副葬品として埋葬された時である。第二部では，文書が埋葬品として出土する事に注目し，その様態から，廃棄（墓内に保存）に至るまでの最終的な過程を検証した。

吐魯番出土文書の埋葬品としての分類については，荒川氏が出土文書を大きく2種類に分けられた。すなわち（A）埋納時には文書として完存していたはずの，埋納すること自体を目的として納められた文書，（B）二次利用されて納められた文書の，両種があることを指摘された。（A）は，被葬者の遺体の近くに置かれることが多く，すなわち衣物疏や功徳疏のように被葬者とともに埋葬する目的で新たに作製されたもの。（B）は，埋葬品として二次利用されたもので，具体的には紙鞋･紙帽･衣裳や棺，あるいはまた泥俑の芯部分や敷物の裏貼りなどに利用された紙である。

そのうち（B）の多くは勾勒や署名が為された公文書で，ある官署に関する内容に集中した文書が一括使用され，また両面利用の反古紙も多く見られる。第一部において，現実世界における文書の最終的保存が官署別で為されていた可能性を述べたが，まとまった文書が同時期に同じ埋葬品の素材として利用されているということは，ある程度まとまった形で反古紙として放出されたものと推測した。それが，売買であったのか，払い下げと

いう形であったのかは，文書が素材に変化する上で考慮しなければならない事項であるが，現在のところは不明である。

この素材を利用して製作する副葬品については，トルファン地方での墓葬形式や明器の種類，俑類の製作方法が唐代までさほど変化しておらず，また高昌国・唐時期の墓からは同じように紙鞋・紙帽・紙棺などが出土することから，トルファン地方においても，埋葬関係を専門とした工房の存在をみることは可能であると考えた。

さらに，紙鞋などが発見される墓の墓主は，絹や錦なども伴出することからも，ある程度高い階級の出身であったと考えられ，また紙鞋以外にも絹靴などの工芸品や革靴なども出土していることから，紙製品のみを血縁者が直接に製作したとは考えにくい。血縁者自らが入手した材料としての反古紙を専門業者に一括提供したという可能性もあるが，紙が貴重であった吐魯番地域において，反古紙の残りや残片は，再利用の時までに大切に保管されていたとすれば，同時期の被葬者の埋葬品に流用され，その結果様々な文書が混在して埋葬品に利用されることも考えうる。従って文書内容と被葬者の関係について直接に結びつけるのではなく，なお慎重な見方が必要である。また副葬品の鞋には，紙のみならず絹や革製のものもあるが，これは墓主の地位，或いは当時の紙製の埋葬品の価値，さらには紙製埋葬品が頻出する後代の埋葬習俗の変化と関係すると思われ，紙製埋葬品以外の明器とともに総合的に検証しなければならない。

３．新井一寛・松田いりあ・梁仁實「映像都市研究の構築に向けて――学際的共同研究による映像実践を通じて――」

研究協力者：岩谷洋史（神戸学院大学），川瀬慈（京都大学アジア･アフリカ地域研究研究科），七五三太輔（京都大学アジア･アフリカ地域研究研究科），内藤真帆（京都大学人間・環境学研究科），山中千恵（仁愛大学），柳沢英輔（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）

2007 年度大阪市立大学都市文化研究センターのドクター研究員として，おもに以下の４つの研究活動による成果を挙げた。

第一に，「宗教と社会」学会第 14 回学術大会において，次の分科会を実施し，映像実践を通じた宗教学の可能性について探求した。「タリーカ（スーフィー教団）の自画像に見るポリティクス――現代エジプトにおけるジャーズーリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例を通じて」パネル「映像宗教学の射程」（コーディネーター・司会：新井一寛，他の発表者：岩谷洋史，南出和余，岩谷彩子，小田昌教，コメンテーター：北村皆雄，田中雅一）。この分科会により，宗教研究における映像実践の問題点と可能性を明らかにすることができた。

第二に，UCRC ドクター研究員共同研究プロジェクト「映像都市研究の構築へ向けて――学際的共同研究による映像実践を通じて――」の代表をつとめ，計５回の研究会を開催した。そのうちの第３回研究会「映像実践のコミュニケーションにおける人類学的探求」では，自身も「撮影・編集・上映のコミュニケーション」の発表と映像作品『同居とカメラ』（38 分，日本，2007 年－）の上映を行う。この共同研究では，NPO 法人によるホームヴィデオ収集から映画における都市表象に至るまで，都市研究における様々な映像実践の可能性を多角的に把握することができた。

第三に，第二の共同研究プロジェクト協力（主催：映像社会学研究会，共催：京都造形芸術大学）によるシンポジウム「「あつめる」から「ひらく」へ――ポピュラー文化の資料アーカイブズをめぐって――」におけるプレセッション「とる，つかう，つくる」のコーディネーターを担当した。自身も同セッション内で映像作品を上映し，口頭発表「『同居とカメラ』と「作品」概念――撮影・編集・上映における「人」とのコミュニケーションの考察を通じて――」と，映像作品『同居とカメラ』（38 分，日本，2007 年―）の上映を行う。このセッションでは動物行動学，生態人類学から言語学，文化人類学，社会学，民俗学までの映像実践を検討した。その結果，映像実践に関する文理共通の問題点の把握や文理共同の可能性の追求ができた。また，シンポジウム全体では，日本における映像アーカイブズの現状について，映像収集・保存から収集した映像の収集元への「成果還元」に至るまでを把握することができた。

第四に，トヨタ財団アジア隣人ネットワークに採択されたプロジェクト「映像実践と映像作品の新たな可能性を求めて――中東・東南アジア・日本の映像実践ネットワークの構築を通じて――」（代表：新井一寛）で，シリアのダマスカスとレバノンにおいて，上映会とシンポジウム，会議などを実施した。その結果，日本における映像人類学とドキュメンタリーの現状について現地の人々に紹介すると同時に，現地の映像関係者と，映像作家と研究者による映像実践を通じた協働に関する意見交換，ネットワーク構築ができた。

４．廣瀬真琴・深見俊崇「教育困難校に挑む教師のアクションリサーチ研究」

研究協力者：高谷哲也（大阪市立大学文学部・特任講師），上森さくら（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

⑴　研究の背景と目的

現在，学校現場は，「学力低下」をはじめとする様々な問題に直面しており，数々の教育改革が打ち出されている。しかし，本来，改革の前提には，これまでの改革

の検証と，現在の学校教育現場の正確な実態把握があるべきであり，現場の現実を出発点とした提案でなければならないことは言うまでもない。しかしながら，現在特に盛んに叫ばれている「学力向上」「教員の資質能力向上」「学校の組織改革」といった改革テーマにおいては，本当に対策・支援が必要である問題の本質が十分な実態調査等によって検証されないまま，個人的な印象や経験のみに基づいた改革が急速に進められたり，これまでに築きあげられてきた学校組織・文化のあり方や，現状の教師の力量が，問題の根源であるかのように強調されたりしているように見受けられる。

そこで，本調査では，PISA ショックや，全国学力テストの実施などを契機に，多くの自治体における政策上でも，現在特に重要視されてきている学力の問題の内実を，具体的にどのように考えていけばよいのかを考察するための一助として，長年学力的に厳しい状況に置かれてきたある中学校の現実に着目する。

数ある学校の中でも，特に深刻な学力不振の問題に苦悩し続けている学校を対象に，学校現場が実際に直面している問題はどのような性格のものであり，教師は問題をどのように認識しているか，そして，いかなる工夫と努力をもって，それらに対応しているかを明らかにする。これにより，現実に学校現場に現れている困難な状況とはどのような特徴をもっており，本質的な問題の解決に必要となる支援や条件整備は何かを，最終的な研究知見として呈することを試みる。

⑵ 調査対象と調査方法

本研究が調査対象とする A 中学校は，旧同和地区にある公立中学校である。同校は，長年，厳しい学力実態と進路実態に関する課題を抱えてきた。また，生徒の約 75%が，何らかの就学援助を受けており，生活保護世帯が約 2 割を占める。そのような地域的背景をもった同校は，2001 年度より，「学力」「人権感覚力」「生活力」の 3 要素を，地域と共に歩む「地域に開かれた学校づくり」の中で保障していくことを目指した 5 年計画を策定し，様々な教育実践に取り組んできた。

今回，対象としたのは，その取り組みの中でも中核的な役割を担ってきた，各種主任等を担当する 5 名の教師（A ～ E）である。教師 B，教師 C，教師 D は，前任校等においても，同和教育推進校での勤務を経験したり，荒れた学校の建て直しに精力的に携わったりと，人権教育や生活指導上の問題を中心に多く関わってきた教師であり，裁判所，警察，児童相談所等の関係諸機関との連携や，地域との関係構築等の経験も豊富な教師である。インタビュー調査によって，各教師には，A 中学校に赴任してから感じた前任校等との差異点を確認しながら，A 中学校において特に重点的に取り組んだ教育活動ならびに，直面してきた課題等について語ってもらった。

なお，報告者らは，2005 年度からの 2 年間，大阪市立大学と同校との学力向上プロジェクト（共同研究）に携わっており，研究会議や反省会議，年 3 回の校内研究授業，十数回の習熟度別授業の支援等にも参画してきた経緯がある。本調査におけるインタビュー内容や考察は，その際に把握・経験した同校の生徒の学力実態や，教師の問題意識，教員文化等に基づいている。

⑶ 結果と考察の概要

本調査では，旧同和地区にある公立中学校である A 中学校の各分掌のリーダー達に対してインタビュー調査を実施したが，彼・彼女らの認識している同校が抱える課題の概要は，以下のとおりである。

①生徒の家庭における経済的厳しさ
②保護者の生活リズムや子どもの学習に対する意識上の問題
③加配教員の減少による人手不足

これらの課題は，地域がもつ旧同和地区や家庭の経済状況という歴史的・社会的背景に根ざすものであり，一足飛びで解決できるものではないが，その対応の基本的な方向性として，学校を健全化させるプロセス（荒れの克服 → 不登校問題への対応 → 学力向上）が，教師たちの語りにおいて共通に確認された。例えば，教師 A は，研究部長として，学力向上のために校内での研究授業や日々の授業の充実を図る立場にある。だが，最近では学校が落ち着く反面，その雰囲気に合わない生徒が授業を飛び出すようになってきていた。それゆえ，まずは，各教科の授業成立を前提とし，「生徒それぞれの細かい部分をしっかり見ていく」「そういう部分をしっかり引き継ぐ時期に来ているのではないか」と，教室に入らない生徒に「寄り添う」ことが中心となっていると語っている。つまり，A 中学校における生徒指導の基盤として，「一人ひとりの生徒を切り捨ての論理ではなく，ありのままを受け入れることから始めるスタンス」（教師 C）が確認された。

そのことは，加配減による仕事量の増加への対応にも共通して見られている。教師 E は，教務部長として，「今の僕の仕事としては，他の先生が，オレ自身もだけど，子どもとかかわれる時間をいかに増やすか」が重要であると語っていた。また，他校では授業時間数確保のために導入されている「セメスター制」についても，「カリキュラムを変えて子どもと向き合う時間を作る」（教師 A）ことを目的に，A 中学校では導入されている。

最後に，上記の各種の取り組みや課題への対応の基盤を支えるものとして，同僚間の一体感，柔軟性が重要であると認識されていた。インタビューでは，教師間のコミュニケーションが，教員組織の重要な要となっている旨が説明された。

だが，その一方で組織を同じ方向性で縛り付けないこ

とが重要とみなされていた。組織的に対応している事柄をインタビューで尋ねたものの，具体的な活動は語られなかった。むしろ，個々の教師が，自らの力量を発揮しながら，各々の課題に対応している実態が語られた。

以上の結果から，同校が目指す「人権感覚力」,「生活力」,「学力」のうち，前二者に課題があるという教師たちの共通認識が確認できる。つまり，学力やそれを育む授業よりも，生活や人権感覚といった地域的背景への対応が，A 中学校が抱える重点的な課題であると，教師たちは認識していると言えよう。

それでは，A 中学校において学力保障・向上を図るためにはどうすればよいか。ひとつは，教師たちが認識している「人権感覚力」と「生活力」面での課題を軽減する方向での支援，つまり，学校が抱える課題に対する包括的な支援である。

A 中学校の事例研究からは，①生徒の家庭における経済的厳しさ，②保護者の生活リズムや子どもの学習に対する意識上の問題,③加配教員の減少による人手不足,という課題が確認された。その改善方策として，①生徒の家庭における経済的厳しさを支える行政的支援，②保護者の生活リズムや子どもに対する意識を変革していくための小中連携事業の推進，③加配教員の増加，の 3 点が提案できる。

また，教師たちの組織的対応の喚起が重要となるであろう。どの教員からも，同校では教員間の連携がスムーズであるとの回答を得ているが，各分掌として組織的な取り組みや協働がみられるかという問いに対しては，回答を得られていない。組織的な対応というよりは，個々の教師が自らの力量において個別に実現を目指している傾向が，インタビューから伺えた。学力保障・向上は，全校的（学年横断・縦断的）な取り組みであり，系統だった指導・学習支援が求められる。同校においても，組織的対応が必要であろう。教員間の連携や組織的対応を促すシステム開発に，同校の教員らが改めて取り組むためにも，上記のような支援が求められる。

⑷　まとめと今後の展望

わが国では 2007 年から年に一度，全国学力・学習状況調査が実施されている。全国の小学校 6 年生，中学 3 年生の国語と算数・数学についての学力を測定すると同時に，生活習慣や学習環境などの状態を質問紙調査により把握するものである。文部科学省は,「学校の実践改善に役立てる」ものとしてその調査を明確に位置付けているが，このような学力テストの実施については,「数値目標」による学校経営とその評価，教師に対する評価と管理，及び「数値測定」による学校間の競争を激化させるとの批判もある。

学力テスト自体はその方法上，各学校・地域が抱えている独自の問題の性質や大きさと，学力の関係までを考慮することが困難である。そのため，本来，各学校の学力向上の議論には，地域や子どもの実態や保護者の教育観,学校･教員組織の文化･指導観などとの関係も含めて,テストの結果を分析することが必要不可欠である。しかし，それらを無視した，各学校の順位や全国平均との差といった,「数値」結果のみに基づいた学校批判が起こりかねない。

本調査は，この全国学力・学習状況調査では数値として浮上しにくい諸点に迫るものである。すなわちそれは,教師の主観に沿った「学校を取り巻く課題」認識の解明である。教師たちが認識している課題を軽減することを手始めとして，彼らが学力や授業へと取り組むことを励ます方向で，学力保障・向上に資する包括的な支援の具体を提示できたことは意義深い。そして本調査のさらなる意義は，同様の課題を抱える学校を支援し，学力保障･向上の具体的方策を検討するための，ひとつのアプローチを呈することができた点にある。教師の認識論から学校を取り巻く諸問題の改善策を検討することで，それぞれの学校の実態に応じた，具体的で包括的な支援の在り方が提案できる。

しかし，その際には，学力保障・向上へと極端な舵取りをするのではなく，例えば生徒指導や部活指導，生徒のケアリングなど，各教員が自身の経験や信念から構築している自己実現を損ねることがないよう，それらを生かす方向で,学校独自の展開が期待される。というのも,本調査で改めて確認できたことは，地域・学校に形成されてきた歴史・文化の重要性である。それらは，学校を取り巻く問題の決定的な核となっており,学校としての,教師としての対応を不可避に決定付ける。今回，調査協力を得た A 中学校のように，学力の問題が地域や生活背景等といった諸問題と複雑な関連を見せる場合には,外からの改革ではなく，学校の内部にいて，実際に課題と向き合う教師たちの力量を生かす方向での支援(地域･学校を単位とした問題解決を支援できるボトムアップ型システムの構築）が求められるのではないか。

この点も含め，学校に対する包括的支援をより具体化し，学力保障・向上への一助とするために，更なるリサーチを試みたい。

＊本報告は,第 60 回関西教育学会（2008 年 11 月 9 日）において口頭発表（代表者 ; 深見, 連名 ; 高谷･廣瀬）した資料を要約したものである。

５．足立匡敏･根来麻子「鈴木健一氏著『古典詩歌入門』書評会」

研究協力者：西田正宏（大阪府立大学人間社会学部准教授），三根亞希子，小笠原愛子，能登敦子，田中寛子（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生），岡﨑智美，久米史織，三田聡美，岡嶋奏歩，福地香織，

堀友美，門野里海（以上，大阪市立大学文学部・学生），高重久美（大阪市立大学大学院･研究生），南山かおり（大阪市立大学大学院博士課程単位取得退学）

⑴ 鈴木健一氏著『古典詩歌入門』書評会

2007年9月19日（水），学習院大学教授である鈴木健一氏を本学にお招きし，氏の著書『古典詩歌入門』（2007年4月，岩波書店）の書評会を行った。会では，院生4名による発表（書評）を中心に，和歌研究の現状や今後の可能性などについて議論を行い，非常に充実した会となった。ここでは，当日の内容についてだけでなく，書評会開催にいたる準備も含めて報告する。

⑵ 「遠里小野会〈和歌史を学ぶ会〉」の活動

書評会の報告に先立ち，共催した「遠里小野会〈和歌史を学ぶ会〉」（以下，「遠里小野会」と略す）の活動について紹介・報告しておきたい。遠里小野会は，2006年に大阪市立大学国語国文学教室の大学院学生・学部生を中心に結成した研究会である。上代から現代までの和歌史を様々な角度から勉強することを目的とし，テキストの輪読と研究発表という形式で月二回の研究会を開催してきた。2007年度は，『岩波講座　日本文学史』（岩波書店，1995年11月～1997年6月刊）をテキストに用い，発表担当者が，テキストのまとめとテキストの内容に関連する研究発表を行った。その活動の記録を以下に記す。

5月17日　三根亞希子；「短歌・長歌の成立」（第1巻）まとめ／「紀歌謡「思邦歌」と記歌謡「思国歌」について」
5月31日　根来麻子；「萬葉集の構成の展開」（第1巻）まとめ／「萬葉集巻六の構成をめぐって」
6月14日　三根亞希子；「〈歌〉における古代要素」（第1巻）／「遊行女婦児嶋の「袖振之歌」について」
7月12日　田中寛子;「歌謡につどう神･女･男･物々」（第1巻）／「神楽の表現――小前張「薦枕」の成立をめぐって――」
7月19日　能登敦子；「古今和歌集」（第2巻）／「《寓意》の歌――『古今集』の「晴」の意識について」
7月26日　小笠原愛子；「和歌の展開――十世紀」（第2巻）／「琴の音にかよふ松風」
8月9日　能登敦子;「和歌の展開――十一世紀」（第3巻）／「古歌の利用をめぐる論――『難後拾遺』を中心に――」
8月23日　小笠原愛子;「和歌生活――女歌と物語」（第3巻）／「万葉集から大和物語へ――菟原処女の人物像の変容」
9月6日　高重久美；「和歌の革新」（第3巻）／「本居宣長の軸」
10月4日　高重久美;「古典学のはじまり」（第3巻）／「本居宣長の歌」
10月25日　高重久美；「和歌の消長」（第5巻）／「貞治六年の中殿御会」
11月8日　小笠原愛子；「関東の文学と学芸」（第5巻）／「新島守考」
11月22日　※該当論文を出席者で講読　「歌謡と芸能」（第6巻）
12月6日　三根亞希子；「堂上和歌と歌論」（第6巻）／「「万治御点」にみる後水尾歌壇の評価基準」
1月17日　根来麻子;「近世前期の学問」（第8巻）／「契沖哀傷歌にみるその歌風」
1月24日　足立匡敏；「和歌の革新と伝統」（第10巻）／「江戸期における歌題の拡大」
2月14日　足立匡敏;「維新期の詩歌」（第11巻）／「幕末和歌の達成」
2月21日　足立匡敏；「詩歌の革新」（第11巻）／「写生の深化」
3月5日　能登敦子；「古典の継承と再生」（第7巻）／「長嘯子の歌の革新性――夏歌を通じて――」
3月26日　根来麻子；「詩歌の近代」（第12巻）／「前田夕暮『収穫』にみる自由律への萌芽」

年度末には，上記発表内容をそれぞれが文章化して小冊子を作成し，研究会メンバーおよび国文学教室の学部生・院生・教員に配布した。

⑶ プロジェクト内容の決定

今回の企画は，2007年4月に刊行された鈴木健一氏著『古典詩歌入門』について書評会を行うことである。ただし書評会と言っても同書の内容をまとめ批評することに終始せず，参加者それぞれがこの書を受け止め，新たに提言を加えるようなシンポジウム的書評会にすることを企図した。

⑷ 書評会開催までの準備

当日まで，以下の日程で『古典詩歌入門』の理解を深めることに努めた。

8月9日（木）鈴木先生の研究史について
8月16日（木）『古典詩歌入門』「Ⅰ　第一部」についての読書会
8月23日（木）『古典詩歌入門』「Ⅰ　第二部」についての読書会
8月29日（水）『古典詩歌入門』「Ⅱ　第一・二部」についての読書会
9月13日（木）　書評会プレ発表会

読書会では，遠里小野会メンバー全員で該当箇所を通読し，各自が持った感想・疑問点などを出し合った。その内容を参考に，発表担当者がそれぞれの書評をまとめ，当日に備えた。

⑸ 当日

当日は，司会の高重久美氏による鈴木先生の紹介の後，次の4名の院生が，それぞれの観点から書評を行った。

〈自然〉と〈人間〉という評価軸をめぐって

能登敦子
「第二章『〈伝統〉と〈現在〉』」について
三根亜希子
テキストの〈内部〉と〈外部〉との関わりをめぐって
根来麻子
実証と感性
――『古典詩歌入門』の構成と研究史における意義――
足立匡敏

休憩をはさんで，鈴木先生から 4 名に対し発表内容についての質問や意見をいただき，その後，会場の遠里小野会のメンバー，当日の参加者を交えて議論を行った。鈴木先生が，私たちの発言を丁寧に受けとめお答え下さったおかげで，参加者が発言しやすく，議論は終了予定時刻を 30 分以上過ぎてようやく終了した。会の終了後，いわし亭で先生を囲み懇親会を行った。

⑹　成果

何よりもまず著者を前にして書評を行うという会の形式が，発表者にとって緊張感があり，かつ刺激的であった。また『古典詩歌入門』の内容が，日本の詩歌を通史的に考える上で根幹となる表現の多義性・重層性の問題を考察しており，参加者それぞれが自身の研究を広い見地から捉え直すよい機会になった。加えて当日までの準備の中で，書評とは何かということを考えたことも意義深かった。さらに会の終了後，鈴木先生と食事をしながら親しくお話させていただいたことも，先生を大学にお呼びしてこそできる貴重な経験であった。

今回，基本的にドクター研究員の手で自由にプロジェクトを創り上げることが許された。そのため企画段階から新しい研究を提唱しているような感覚があり，プロジェクト終了後も言いようのない達成感があった。こうした機会を与えていただいたことに，深く感謝したい。遠里小野会のメンバー，そしてお忙しい中，書評会に参加して下さった塚田孝先生，丹羽哲也先生に対してもこの場をお借りして感謝申し上げたい。

⑺「遠里小野会」の活動に対する書評会の意義

書評会とその事前準備を通じて学んだ『古典詩歌入門』の内容，ならびに鈴木先生の和歌研究に対する姿勢は，その後の研究会席上における議論でもたびたび話題に上り，書評会開催以前には持たなかった視座で和歌史を見通すことができるようになった。その意味で本書評会の開催は，遠里小野会の水準向上につながったといえる。またさらに，書評会を通じて遠里小野会メンバーに，これまで以上に強い結束が生じた。上述したように遠里小野会は，博士課程を修了した研究生から学部生まで，幅広いメンバーで構成されている。以前から，学部生が発言しやすい雰囲気作りに努めてはいたが，どうしても院生中心に議論が進行してしまうことは否めなかった。今回の書評会を通じて得た知識や席上での議論が紐帯となり，学部生がその後の研究会での議論に参加しやすくなったことも，大きな成果のひとつであった。

6．村上ゆり「富山太佳夫氏を迎えての勉強会」

勉強会では，富山太佳夫氏に「都市文化としての貧困――世紀転換期のロンドンにおける貧民救済と宗教活動」というテーマで講義をしていただいた。

富山先生の一連の講義の中で，作家ウオード夫人についての解説がなされた。その解説を基に，私の研究課題であるヴァージニア・ウルフとウオード夫人の生き方を対比させた研究論文を現在進めている。ウオード夫人とウルフの生き方に対する意識の違いをブルームズベリー・グループに属していた仲間たちとウルフとの関わりを軸にして分析する。ロンドンで発生した「ブルームズベリー・グループ」がウルフの都市生活における社交或いは執筆活動の重要源であったことは広く知られている。ウルフは仲間たちと目指したブルームズベリー・グループの活動からどのような影響を受けたのか。信仰小説家であったウオード夫人と無神論者といわれるウルフが後世に伝えたかったことは何であったのだろうか。以下はその研究論文の途中までの概要である。

「意識革命の発祥地？ブルームズベリー・グループとウルフ」

Ⅰ　序論

18 世紀後半にヨーロッパ諸国の先陣を切ってイギリスで産業革命が始まった。鉄道建設，蒸気機関車，金属工業の繁栄等がイギリスの社会構造を根本から変化させた。この革命によって，イギリスは世界経済の核になっていった。

従来の階級制度社会の中でブルジョワジーが貴族に取って代わり影響力を持ち始めた時代でもある。産業革命は社会生活の物理的な繁栄を象徴するものであったが，表面的な物理変革だけでなく，知識階級人たちの間では精神的な意識革命をも引き起こすことになる。20 世紀初頭にウルフ姉妹が中心となって活動を続けたブルームズベリー・グループが目指したものは「精神文化」であり，ヴィクトリア時代の既成概念から離れ，伝統や権威にとらわれないで自由に芸術を享受し，自由闊達な討論をする場であった。

Ⅱ　メイナード・ケインズ（1883-1946）とウルフについて

ケインズは 1929 年アメリカ大恐慌の際に実施されたニューディール政策に大きな影響を与えたといわれる経済学者であるが，のみならず芸術を深く愛したブルームズベリーの主だったメンバーの一人であった。彼にとって政治や経済はそれ自体が社会生活の究極の価値であるのではなく，それは良い社会（精神性の高い状態）を実現する手段にすぎない（中矢：43）のであった。ウルフ

はケインズの高い知性と行動力を高く評価していた。しかしケインズが労働者階級出身のバレリーナ，リディアとの結婚を決めブルームズベリーに彼女を連れて出入りしだすと，ウルフは二人の関係に真っ向から反対した。知性のないリディアのせいでブルームズベリー・グループの存続が危ぶまれることを心配し，友人のジャック（フランス人画家でウルフは頻繁に手紙のやり取りをしたり，自分の作品を送ったりして特別の思い入れをもっていた友）へ心情を吐露した手紙を送ったりした。

しかし結果的にはウルフの悩みは杞憂に終わった。ケインズはリディアと生涯をともにして最後まで飽きるどころか，愛し続けて知識階級の人間が持ちえない，素朴で一種独特のバレエダンサーとしての彼女の感性を楽しみ，「伝統や権威にとらわれない」というグループの目指した基本姿勢を実践したのだ。

Ⅲ　リットン・ストレイチー（1880-1932）とウルフ

ストレイチーの周囲には同性愛的傾向が少なからずあった。ストレイチーはウルフに求婚するがすぐにプロポーズを解消して，結果的にはレナード・ウルフにヴァージニア・ウルフとの結婚を強力にすすめた。ウルフとリットン・ストレイチーとの関係が男女のそれではなく友情で結ばれていることを報告する手紙もある。

ストレイチー一家はまさに“an intellectual aristocracy of the middle class”（Leonard Woolf 1：119）であり，9人の兄弟姉妹全てが何らかの形で知的な仕事に従事している。ウルフの弟エイドリアンと結婚しているカリン・コステロの姉である，レイ・コン・コステロはリットン・ストレイチーの兄のオリヴァー･ストレイチーと結婚し，レイ・ストレイチー（1887-1940）となる。彼女は英国での女性の地位向上のための運動史 *The Cause* を書き上げた。なかでも女性選挙権運動の過程や多くの社会状況を見事に反映したこの書はフェミニストのみならず多方面に亘る研究者の必読の書となった。ウルフがこの書から多大な影響を受けたことはいうまでもなく，実際にウルフは彼女の作品 Three Guineas（1938）に「女性の男性への政治的影響力」についての一節をレイの文章を土台にして書き上げていた（出淵：369）。レイはブルームズベリー・グループとは直接関係があったわけではないがウルフの義妹という関係からウルフと親交があった。*The Cause* の中には多くの歴史的フェミニスト達に混ざってウルフと対照的な女流作家として取り上げることのできる，ミセス・ハンフリー・ウオードが女性参政権運動に反旗を翻し反対運動グループの先頭にたって奔走していたことが書かれている。（Ray：284）

Ⅳ　ハンフリー・ウオード夫人（1851-1920）とウルフ

英国の小説家であり社会実業家であった彼女は（本名はメアリー・オーガスタ）1888年に小説 Robert Elsmere を出版した。この小説は精神主義的ロマンス小説として当時の社会で大人気を博した。ウルフとウオード夫人の共通点として知的貴族の出身であるという点を上げることができるのだが，同じような恵まれた環境で教育を受け育ったであろう二人の作品には対照的な違いが見られる。ウオードの作品が（例えば Robert Elsmere）ロンドン，イーストエンドの貧民街を背景にした宗教色の濃い作品に仕上がっているという点に対して，ウルフの作品では貧民街を背景にしたものは見当たらず，むしろロンドンの中産階級の家庭を対象にした作品が多くみうけられる。その中の一つ Mrs Dalloway を取り上げてみても，ウルフの宗教観は一般的な敬虔なキリスト教信仰者とは程遠いウルフ特有の精神的な捉え方で表現されている。

ウオード夫人の社会的な活動，例えばロンドンの貧民地区にセツルメント（貧民救済所，授産所や託児所等の社会事業施設の設立）を作ったことなどから，彼女が社会慈善事業活動家として「家庭の天使」ならぬ「社会の天使」であったと捉えることができる。この言うなれば「社会の天使」という表現を決定付けている彼女の活動が「女性参政権反対連盟」初代会長である。

ウルフの著作活動の一つの大きな目的は「家庭の天使」を如何に殺すかという点がテーマとして掲げられている。つまりウオード夫人とウルフの女性観は対極に位置していることになる。同じ知識階級出身の二人の同じ著作活動からの二人の差異を比較分析することで，ウルフが作品に訴えている特質が明白になる。ウオード夫人の社会慈善活動の潜在的な意識の中には看護活動を通して「クリミアの天使」と呼ばれたナイチンゲールの生き方を重ねている部分が見られる。それは双方とも恵まれた資財と人脈をフルに利用して慈善活動を行ったことである。レイは The Cause の中で，世間一般に知られている「クリミアの天使」の部分に加えて，女性の地位向上問題に対するナイチンゲールの本音の部分を明らかにしている。

ナイチンゲールは宗教問題についての著書を多く残した。著書の中で「母親たちがなぜ英国教会に似ているのか」「貧しい人々への慈善事業を『憂さ晴らし』」（Ray：27-28）などと表現して彼女の信仰や心の動揺を覗かせている。またウルフの有名な一節「女性も年500ポンドの収入と鍵の掛かる部屋を持つ必要がある」というくだりを逆の立場でナイチンゲールが 女性に500ポンドを与えるという 状況を次のように描いた。“It makes me mad, the Women’s Rights talk about ‘the want of field’ for them——when I know that I would gladly give £500 a year for a woman secretary… They don’t know the names of the Cabinet ministers. They don’t know which of the Churches have Bishops and which not…”(Ray: 25) ナイチンゲールは，この引用文の中で

たとえ自分の秘書に 500 ポンドの給料を出したところで，女性は一般的に社会常識に欠け，社会生活をする力にも欠けていると嘆いている。ウルフは 500 ポンドの収入が経済的自立を，部屋の鍵は精神的自立を意味し，活動の不可欠な条件として主張した。ところがナイチンゲールは女性の能力とはそのようなものだとあきらめきっている。これはウオード夫人が女性参政権反対連盟の初代会長として，女性が参政権を持つことに反対したことに通じる。

自立心旺盛なウルフの生き方と，ウオード夫人の家庭の天使的生き方――即ちヴィクトリア時代の女性のあるべき姿から抜け切れない生き方――のふたつの相対する女性の生き方の比較からウルフの意識が如何に時代を先取りした自由で革新的なそれであったかが理解できる。

Ⅴ　結論

Ⅱ章のケインズの姿勢はブルームズベリー・グループの一人として，皮肉にも閉鎖的ともいえる或いは特権階級意識がぬけきれず模索中ともいえる葛藤するウルフに対しての強制的意識革命の一手段を示している。このケインズの判断，行動こそがブルームズベリー・グループの目指した新しい自由の選択にほかならなかったのだから。Ⅲ章のストレイチーに関してであるが，リットン・ストレイチーも義姉のレイと同じように Eminent Victorians の中で，ナイチンゲールの影の部分に触れた著作を行っている。リットンとウルフとは彼女の弟の婚姻で親戚関係にもなる為に関係が深く結びついているのだが，お互いの著作活動においてもグループの仲間として，互角に学びあい，影響を及ぼしあえた親友同士であったといえよう。Ⅲのウオード夫人に関してはブルームズベリーの主題から少し離れるが，ウオード夫人や，ナイチンゲールの生き方，考え方はその時代の女性として非凡であったにも関わらず，ウルフが後世の為に残した「意識革命」という精神的革命の影に過去の遺物として語り継がれる結果となる。ウルフが基本的に体得していた物書きとしての素養をよりはっきりと磨き上げる場所として，ブルームズベリー・グループが大きな役割を果たしたことは確かである。以上述べてきた理由で，ブルームズベリー・グループが意識革命の発祥地の役割を果たし，革新的で新しい芸術家なり学者なりを世に送り出す源泉地であったとの位置づけを理解することができる。ウルフ，ウオード夫人，ナイチンゲールの宗教感の考察は引き続き重要な課題となっている。

参考文献

・Bell, Qwentin *Bloomsbury* 1968, Weidenfeld & Nicolson, London, 1990.
・Mrs Humphry, Ward *Robert Elsmere* 1889, Smith Elder Co. London.
・Strachey, Lytton *Eminent Victorians* 1918, Oxford World's Classic, Oxford Univ. Press, London, 2003.
・Strachey, Ray　*The Cause- A Short History of the Women's Movement in Great Britain* 1928, Virago Ltd., London, 1978.
・Woolf, Leonard *An Autobiography* Vol.I Ed. Quentin Bell, Oxford Univ. Press, London,1980.
・Woolf, Virginia　*The letters of Virginia Woolf Vol I:1888-1912* Ed. Nigel Nicolson, Harcourt Brace Jovanovich, London, 1975.
・Woolf, Virginia *The letters of Virginia Woolf Vol. III :1923-1928* Ed. Nigel Nicolson, Harcourt Brace Jovanovich, London, 1977.
・Woolf, Virginia *A Room of One's Own and Three Guineas* Ed. Morag　Shiach, Oxford Univ. Press, London, 1992.
・Woolf, Virginia *Mrs Dalloway* 1996, Wordsworth Edtions Ltd. Hertfordshire
・ストレイチー，レイ　出渕敬子他訳 『イギリス女性運動史　1792 － 1928』みすず書房，2008
・中矢俊博 『ケインズとケンブリッジ　芸術劇場――リディアとブルームズベリー・グループ――』同文舘出版，2008

7．王標「清末浙東における知識人の読書空間」

2007 年度は主に李慈銘の『越縵堂日記』を通して清末の読書環境を復元し，具体的な歴史の背景の中で，伝統的学問の最後のリーダーとして李慈銘はいかに読書し，その生活空間が読書空間に対して一体どのような影響を与えたのか，伝統的学問の終焉の原因は一体何であったのか，「浙東学派」という歴史（神話的な歴史）の集団的な作用が読書プロセスの中で地域知識人の物の考え方にどれほど大きな力を及ぼしていたか，などの問題を考究し，清末地域社会（特に浙東と浙西）における知識人の読書空間の実態を明らかにした。その研究成果として「作為文化実践的読書――――以李慈銘『越縵堂日記』為中心」と題する論文を『杭州師範学院学報』2007 年第 4 期（2007 年 7 月）に掲載した。その要旨は以下の通りである。

前近代の中国社会において，大衆読書を指導する読書案内がはじめて読書社会に大きな影響を与えたのは，清末張之洞の『書目答問』である。『書目答問』は出版されて以降，清末・民国の近現代学術に極めて深い影響を与えた。読書案内は前近代中国における読書人の共通知識であると同時に，一種の知識規範でもあった。『書目答問』の流行は，明らかに当時の知識社会のニーズに応じていたことを語っている。しかし，清末の知識社会がなぜこのような知識規範を必要としたのか。逆に言えば，当時の知識社会には普遍的な知的アノミー状態が現れて

いたといえるのではないか。この点について，張之洞自身は明言していないが，幸いに，張之洞と同時代の有名な読書人李慈銘がわれわれに詳細な読書生活史である『越縵堂日記』（以下『日記』と略称する）を残している。今回の発表はその『日記』を基本資料とし，李慈銘の読書生活史を通して，清末における一知識人がアノミー時代の中でいかに読書を通して文化的実践を行い，知識規範を再建したかを考察しようと思う。

李慈銘の読書は主に清朝人の著述を中心としている。彼の経部に関する読書の85%は，清朝学術の最も優れた成果である清朝人の経書研究である。李慈銘の読書生活の中，彼にとって，乾嘉時代の考証学者の著作は自分を励ます一種の原動力であり，自分を鞭撻する一服の良薬であった。「毎日，宴会と病気に苦しみ，内臓が酒びたりになり，耳目が薬に惑わされ，読書を長くほったらかした。昨日，枕に頭を載せ寝台で『易』を読もうと思ったが，一卦も読み終えないうちに，すでに眠くなった。今日は出かけて酒を飲んでほろ酔い気分となり，機嫌が少しよくなって，平素から最も好んで読んでいる全祖望・銭大昕・洪亮吉三人の文集を蝋燭をともして読んだところ，悩みが吹き飛び元気が出て，以前の学業を続行しようと誓った」。

李慈銘が読書の中に表現した乾嘉漢学に対する心酔は，まず，文学書の閲読を抑制することに現れた。実は，李慈銘は詩・詞・駢体文が得意で，戯曲を創作したこともある。しかし，このような文学的感性の非常に高い李慈銘が文学書を読む場合の多くは，体の調子が悪くて，疲れてまともな学問に従事することができなくなった時である。例えば「数夜続けて持病が再発し，体がだるくなり，読書ができないため，この日は雑記や小説を取って読む」とある。彼が北京の寓居にある蔵書の配置は大体次のようである。「毎日勉強する経・史の数種及び机を客間の西に移し，寝室の中にもう一つの机を設置し，近年の学者の文集と考証の書だけを置く」。寝室内の近年の学者の文集は説部（筆記や小説）を含む可能性もあり，時間を潰すためのものである。彼は楽しみだけの読書行為を意識的に排斥し，玩物喪志であると考えた。しかし，実際には，これらの楽しく読まれた書物は正統な書物よりずっとよく彼の記憶に残った。

文化的実践としての読書は，知識を獲得するというよりも文化的アイデンティティを人に認めさせるためである。文化の中心的な形式を実践する社会集団へと文化的に近づいてゆく手段という価値よりも，その集団のなかに定着したことを示す徴候としての価値をもつ場合が多い。「想像の文化的社会的集団」の一員として，乾嘉漢学の相続人をもって自任し，伝統的学問の価値観を守ることを自分の務めとし，その社会的集団の文化的威信をおびやかす全ての言説を批判する。乾嘉年間，漢学陣営の内部にすでに自己否定の傾向が現れてきた。その一つは常州公羊学の興起である。しかも，数十年間以来，漢学の発祥地である蘇州はその学風に染められた。それ故に，李慈銘は読書という文化的実践を通して乾嘉漢学（古文経学）を服膺し礼賛する一方，清朝公羊学（今文経学）の学問を「大義が未だに明らかにしていないのに，微言を論ずるのが可笑しい」とか「郢書燕説であり，その根幹がまず間違いである」などと厳しく批判した。

ところが，李慈銘はまた「考証学という学問は後であればあるほど精密になり，細心で高い見識を持たなければ，独自の発見ができない」とも述べている。つまり，乾嘉漢学はすでに高いレベルの学術成果を上げ，普通の経学や史学の考証はほとんど前人に究め尽くされているため，もしも後継者が，梁啓超が「不正なルートでゆき，局部的な研究を行う」と述べたような欠点を避け，正統的な学問世界で堂々と前人に挑戦するためには，前人を超える細心と高い見識が必要だと考えたのである。李慈銘はかつて同郷の先輩学者である章学誠を「読書は鹵莽し，古人を糠秕し，能く是非を明らめず，正変を究めず，汎く一切の高論を持し，臆によりて進退し，己れを矜りて自ら封じ，好んで立異をなし，空虚無実の言を駕す」云々と批判する一方，「識は余りあるも学たらず」と，その「識」を高く買った。しかし，李慈銘は識力が読書プロセスで果たす具体的な働きやメカニズムについては明言していない。

総じて言えば，清朝の儒者たちは純粋な学問研究に没頭し，哲学的な思考を軽視する。清朝中期の考証学者たちはさらに学と政，学と術との分離を強調した。しかし，19世紀初頭になると，社会的政治的危機がますます深刻化するにつれて，儒家の経世意識は全面的に復活し，微言大義を唱える今文経学は顕学となった。漢学陣営の内部にも漢宋折衷の説が現れ，宋学の道徳的内容を完全排斥はしないようになった。李慈銘も宋儒の学問を論ずる時に「宋儒には実はみな独自の奥深い学問があり，明代の人よりずっと優れていた。たとえ意見が少し偏頗であっても，無みすることのできないところがある。それ故に洗練された言葉は随所に見られる」と述べている。李慈銘が読書生活の中に呈した儒学的実践はまさにこのような歴史背景の中に行われた。

『日記』の中には「京邸冬夜読書」と題する詩がある。その詩は全部で四首あり，その第一首には，「礼は六芸の本たり，名物は尤も根株たり。此の事未だ剖析せざれば，安ぞ名づけて儒となすに足らん」と吟じている。儒教思想は礼楽精神の上に作り上げられた倫理学であり，礼は儒者の人文的教養としての六芸の基本である。また，李慈銘は儒家経典の考証を重視し，名物訓詁（考証）は基本中の基本であると主張し，李慈銘は礼学と訓詁を研究しなければ，儒者と称するに足りないと言う。

嘉慶･道光中期以後，伝統漢学は急激な変化を起こし，乾嘉時代以来の一世に秀出る学術的局面が破られ，代わりに宋学と漢学が互いに論争し漢宋折衷を唱える局面となった。乾嘉時代に学術の水面下に潜んでいた宋学はいまや水面上に現れ，新たな転機と発展の趨勢を見せ，どんどん隆盛に向かった。李慈銘の読書生活からもその時代の学問の趨向をはっきり見ることが出来る。

李慈銘が北京に住む期間中，先賢の誕生日に祭祀を行った。その先賢とは，平素から服膺する鄭玄を除き，なんと朱熹である。『日記』には「この日は朱子の生日であり，本来，肯夫や王廉生などの諸君を招いて，小さな集まりを行い，醴酒の敬を設けようと思う」という記載がある。彼は漢儒のように経を治めようとすれば，まず宋儒のように心を治めなければならないと述べ，さらに「一生，敢えて宋儒を軽蔑しない」原因がまさにこれであると認めた。一般には，経を治める目的は世と心を治めることである。しかし李慈銘は翻って心を治めることを学問研究の先行条件として考える。これは清儒の中でも比較的に珍しい言い方である。

李慈銘が読書行為の中に表現した乾嘉漢学に対する心酔にせよ，儒学的表象に対する愛着にせよ，彼が我々に伝えたかったのは知識社会に秩序化をもたらすことであった。儒学的表象をめぐる闘いの中心的争点は，社会構造そのものを秩序化し，そこから社会を階層序列化することであった。張之洞の『書目答問』と李慈銘の『越縵堂日記』との共通点は，動揺する知識社会に秩序を取り戻そうとしたことである。すなわち書巻の世界が表現する知識の整然たる秩序を通して社会的秩序を変換しようとしたのである。しかし，李慈銘が理想的な学術的価値や道徳的価値をもって回復しようとつとめた知的秩序や儒教的秩序は，あくまでも経学の黄金時代の秩序であり，同治・光緒朝以降の知識世界や現実社会に出現しつつある「三千年未曾有の大変局」に対応する可能性は乏しかった。李慈銘と張之洞はいずれも文化的保守主義者であったといえる。しかし，理念型としての「張之洞」のようにある程度の革新的意識をもつ文化的保守主義者であれ，同じく理念型としての「李慈銘」のように徹底的して伝統文化を維持しようとした文化的保守主義者であれ，いずれにしても彼らには中国社会を近代化に向けて歩ませることはできなかったのである。

2008 年度ドクター研究員プロジェクト中間報告

1．足立匡敏･高重久美「日本語･日本文学研究と情報化」研究会

＊研究協力者：根来麻子，大坪亮介，藪崎淳子，能登敦子，田中寛子，岡﨑智美，周宜静，其木格，堀内誠太郎（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生），浅野聡，岡嶋奏歩，隅野裕介，福地香織，堀友美，米田多恵子（以上，大阪市立大学文学部･学生）

⑴　プロジェクトの概要

本プロジェクトは，日本語・日本文学研究を専門にする院生･学部生が，「情報活用能力」と「情報発信能力」の向上をめざして，以下の研究会を行うものである（現在，第 3 回までを実施。第 4 回以降は予定）。

第 1 回　情報活用編⑴ 2008 年 8 月 5 日 「様々なデータベースを有効活用する」

第 2 回　情報活用編⑵ 2008 年 8 月 19 日「日本語・日本文学研究における情報化の現状と課題（公開講演会事前勉強会として）」

第 3 回　情報活用編⑶ 2008 年 8 月 22 日　公開講演会「文系の研究者になぜ情報処理が必要か」（国文学研究資料館・中村康夫氏）

第 4 回　情報発信編⑴「研究発表におけるパワーポイントの利用」

第 5 回　情報発信編⑵「情報発信の問題点を探る――著作権・技術課題を中心に――」

第 6 回　情報発信編⑶「ホームページ・データベース構築の基礎」

⑵　プロジェクトの目的

情報化研究会と聞けば，何らかの新しいデータベース構築を目的にすると思われるかもしれない。しかし，本プロジェクトは，現在存在する様々なデータベースについての情報を整理し，それらの活用方法について考えることを第一の目的とする。なぜなら，現在，すでに多くの有益なデータベースが構築されており，今，むしろ必要とされるのは，それらの情報を集大成し，適切に活用する方法を身につけることであると考えるからである。一口に日本語・日本文学研究と言っても研究分野が細分化しており，研究分野が少し違うだけで，利用するデータベースが異なることもある。研究ジャンルを超えて情報を共有することで，未知のデータベースに出会うことにも期待したい。

第二の目的は，研究発信能力の向上である。残念ながら，日本語日本文学を研究する研究者は，研究情報を発信するためのデジタルリテラシーが，他の分野の

研究者に比べて未だ十分でない。自身のホームページを持っている研究者の数は少なく，学会の研究発表でパワーポイントなどのデジタル資料が使われることは皆無に等しい。研究の発信能力が求められている現在にあって，こうした状況は好ましいものではなく，とくに私たち若手研究者には，研究者・市民・世界に向けてのいっそうの情報発信能力が求められている。また，個人の研究ホームページを開設すれば，様々な研究情報が集まることにもなり，情報を受信する機能も生まれる。つまり，情報発信能力の向上は，情報収集能力を高める上でも有益になると期待されるのである。

⑶　現在までに実施した研究会の報告

①研究会準備会　（2008 年 6 月 4 日）

プロジェクトの採用決定通知を受け，今後の予定を話し合うための研究会準備会を開催した。会では，今後の研究会の内容と公開講演会の講師としてどなたをお招きするかについて議論した。また，次回の研究会までの宿題として，参加者それぞれが普段利用するデータベースの情報を，次回の発表担当者宛てにメールで送ることにした。皆の持っているデータベースの情報を集約するためである。

②第 1 回研究会　（8 月 5 日）

「様々なデータベースを有効活用する」

第 1 回の研究会は，大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程の能登敦子氏が発表を担当した。能登氏は，準備会後に参加者から寄せられたデータベースの情報を，①書誌・目録データベース，②本文データベース，③画像データベースの 3 つのジャンルに分類・整理し，その上で各データベースを紹介された。それぞれのデータベースの，「作成者・運営者」，「and 検索，or 検索が可能か」，「データベースの収録範囲」，「データのダウンロードの仕方」などについて詳しく説明してくださった。

異なるデータベースであっても，検索システムが同一なら，同じ方法で検索が可能になることなどは，興味深い話であったし，今後の利用の上で有益であった。

当初の予想どおり，研究分野が異なると利用するデータベースがずいぶん異なっていた。参加者からは，新たなデータベースを知ることができたと好評であった。そして，普段よく利用するデータベースであっても，意外と機能を使いこなしていないことなどに気づかされた。

③第 2 回研究会　（8 月 19 日）

「日本語・日本文学研究における情報化の現状と課題（公開講演会事前勉強会として）」

研究会で話し合った結果，国文学研究資料館教授の中村康夫先生をお招きし，公開講演会を実施することになった。そこで，講演会の事前勉強会をかねて，第 2 回の研究会を上記のテーマで行った。

発表の要点は，①コンピュータを利用した研究が進むと，情報の共有という視点が大切になること，②すべての人の要望を満たすデータベースはあり得ず，参加・追加型のデータベースという発想が有効であること，③コンピュータという道具の特性を深く理解し，コンピュータを主体的に研究に使いこなす能力が重要であること，などであった。日本語・日本文学研究におけるコンピュータの利用について，現状を整理し，今後を展望する機会になるとともに，講演会にむけて，それぞれの考えを深めるよい機会にもなった。

④第 3 回　研究会　（8 月 22 日）

公開講演会「文系の研究者になぜ情報処理が必要か」

場所：大阪市立大学全学共通教育棟 8 号館 84A

13 時～ 17 時　　参加者：約 25 名

日本語・日本文学に関するデータベース作成の第一人者である中村康夫先生をお招きし，公開講演会を実施した。会は，中村先生のご講演（90 分）と質疑応答（90 分）で構成した。

講演会では，中村先生が開発された様々なデータベースを具体例にしながら，データベースは誰のために，何に配慮して作られているかについてお話し下さった。お話をうかがい，データベースというものについて理解を深めることができ，データベースといえども，客観的なものではなく，作成者の解釈が潜んでいる問題があることが分かった。

また，コンピュータの強み（「同じことを最後まで正確に繰り返す」「忘れない」など）についてお話があり，どういう場面でコンピュータを活用すればよいか，具体的な利用方法を示してくださった。

講演会の後は，質疑応答の時間を設けた。参加者からは，データベースをより良いものにするための具体的な提案（「データベースに自分の発見を，段階に分けて書き込む仕組みをつくってほしい」，「3 つ以上のテクストを画面上で同時に比較対照できるような本文データベースをつくってほしい」）や技術的な質問（「オペレーティングシステムの変化に，データベースがどこまで対応できるのか」），研究へのコンピュータ利用の功罪，中村先生とコンピュータとの付き合い方などについて，多くの意見・質問が続いた。

先生は，それぞれの質問に対して，具体的に実例を示しながら答えて下さり，それが議論を活発にすることにつながった。また，丁寧に答えてくださったので，初歩的過ぎて質問しにくいことも，思い切って質問することができた。

こうした結果，質疑応答の時間は，非常に盛り上がり，当初は，16 時 30 分で終了する予定であったけれども，予定を 30 分オーバーし，17 時に終了した。本当に充実

した講演会であったと思う。中村先生には，心から感謝を申し上げたい。

今後，本プロジェクトでは，「1．概要」で示した第 4 回以降の研究会の開催を予定している。

２．王標「文化的秩序の再建と都市景観の形成――中国知識人社会と地域名勝の相互作用――」

研究の背景と目的

この 20 数年にわたる急速な経済発展によって，中国は国力と国民生活レベルを大幅に向上させ，観光ブームが年々加速している。各地域は観光と結びついて活性化されることに熱い期待を寄せ，また，「道徳的な統合」という社会的需要を満足させるため，地方政府や地元の人々から都市のシンボル的建築物復興の動きが起こり始めている。そのためには，現在，都市景観を再建する際，人々が一体如何にして伝統文化との関連を再構築し，如何なる伝統に繋がる知識を尊重するか，知識の運用が如何なる程度で社会的文化的変遷を反映しているか，を問わなければならない。

本研究は歴史的経験と神話化の二つの方向から，都市景観の形成が文化的秩序の再建に果たす意義を検討するものである。中国都市のシンボル的建築物の多くは明清時代，とりわけ清初に創建あるいは重建されたものである。本研究では，歴史的経験としての文化再建について，主に清初数十年間の景観再建の価値と諸建築物の象徴的な意味を考察し，あわせて景観が激動の時代に生きたエリートたちのアイデンティティの形成に対してどのように影響を与えたのかを検討することを通して，都市型知識人の自己意識および知識人共同体や文化の再建の意義を理解し，地域名勝と知識人社会の相互作用を明らかにする。神話化についての検討は，四つの歴史時期――それぞれ清末，新文化運動時期，文化大革命時期と 21 世紀の現代中国――に分けて文化再建を神話化するプロセスを重点的に説明分析したい。その際には，長江流域（江南・両湖・四川）を対象地域として，揚州・南京・蘇州・杭州・南昌・長沙・武漢・成都・重慶などの主要代表都市を詳細に検討したいと思う。

研究の方法

具体的な分析方法として，まず族譜や地方志や詩文集などの文献資料を使って清初都市の地方史と景観史の輪郭を描き出し，知識人たちの交遊ネットワークを手がかりとして，清初の文人社会が都市と景観に対して有していた歴史的記憶を再現したい。次いで清末以降の雑誌・新聞などのメディアや歴史題材に関連する文学芸術諸ジャンルの作品から，異なる時代の人々の清初文化再建の歴史に対する評価を整理し，歴史的経験を神話化するプロセスを明らかにする。さらに中国各地に行って現地調査を行い，フィールドワークを通して，現在の再建活動の担い手（政府官員・郷土史家・企業家・職人・市民など）に接し，彼らの持っている多様かつ多岐な伝統的知識が如何にして景観再建の過程の重要な方策に影響を与えるかを明らかにしたい。

現在までの研究の進捗状況

今年度はまず雷峰塔の再建について考察している。杭州の景勝地，西湖の南岸に位置する雷峰塔は 975 年（宋開宝 8 年）に呉越王によって建てられた。1924 年 9 月 25 日に倒壊したが，2002 年に復元され，エスカレーターやエレベーターの設置された「近代的」な塔に生まれ変わった。雷峰塔の再建をめぐっては，現在も賛否両論があり，その原因は，雷峰塔にまつわる有名な民間伝説「白蛇伝」――美女に化した白蛇と若者の恋物語――が存在しているからである。その恋物語の結末として，白蛇は法海禅師という高僧に調伏され，雷峰塔下に埋められた。「白蛇伝」は後に崑曲・秦腔・京劇などの演劇に多く採り入れられ，時代とともに様々なヴァリエーションを生み出し，異類交婚譚のもつ悲劇性を超えて男女の愛情が謳われ，中国大衆演劇の代表的な演目となっている。そのため，雷峰塔が倒壊した時に，封建的思想を否定した中国近代の文豪･魯迅は「雷峰塔の倒壊を論ずる」（1924 年）で「いま，それはついに倒れた。天下の人民の喜びはどんなだろう」と歓呼したのである。以来，民衆圧迫の象徴である雷峰塔の倒壊は，すなわち封建主義的権威崩壊の記号であると人々に解読されている。少なくとも啓蒙主義の思想家としての魯迅はそのように考えていたのだろう。

実は雷峰塔にはもう一つの非啓蒙主義的言説の系譜がある。例えば，明末清初の名士･張岱は詩の中で「雷峰は天に倚りて酔翁の如し」，「此の翁，情は淡として烟水の如し」と詠じている。また，雷峰塔の倒壊を目撃した大学者兪平伯も「雷峰塔考略」（1928 年）や「西関磚塔塔磚歌」（1930 年）などの詩文中で雷峰塔の盛衰の歴史を考証し，懐古の情を詠っているが，その文中には文人の哀愁が漂っている。つまり，前近代においては，白蛇と若者の異類交婚は社会秩序を乱す存在であり，人びとは最終的には白蛇を仏塔――聖なる空間――に送りこむことによって，秩序の維持をはかろうとしたのである。近代になって，旧秩序を打倒しようとする啓蒙主義者たちは雷峰塔の倒壊を歓呼した。そして現代，雷峰塔と「白蛇伝」は，地域開発を促進し，持続可能で有効な観光収入を生み出す文化資本として，ついに再建されたのである。今回の研究では，雷峰塔の鎮圧・倒壊・再建の歴史を考察することによって，言説生産や知識生産や権力生産の系譜を明らかにしようとしている。現在「雷峰塔はいつ，なぜ倒壊したか――文化的景観の系譜学的アプローチ――」という論文を執筆

中であり，2008 年 12 月 13 日に大阪市立大学中国学会で研究発表をする予定である。

３．竹本晃「東アジアと日本古代都城をつなぐ道を探る――外国使節の迎接道――」

研究協力者：酒井健治，渡部陽子，濱道孝尚（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

本研究プロジェクトは，現地踏査を含む研究会と講師招聘研究会からなり，現時点で第 5 回の研究会が終了したところである。以下，それぞれの概要を述べる。

第 1 回研究会（踏査） 7 月 20 日に河内国安宿郡と大和国葛上郡の境界にあたる，関屋越えを中心に踏査を実施した。天気は快晴で，参加者は，チーム 4 名と他 1 名の計 5 名であった。

10 時に近鉄大阪線関屋駅に集合し，大和国側から出発した。古手の新興住宅街を登って山道に入り，まず関屋地蔵に到着した。そこから大阪府・奈良県の境界を越え，河内平野が一望できる場所に出て，旧道を分断する新興住宅地（東春日台）を通り，国道 25 号線に至る。ここまでの所要時間は，約 1 時間半であった。

つぎに国道 25 号線に沿って，旧道を辿りながら，東へ進み，旧道沿いにある河内国国分尼寺跡，河内国国分寺跡を見学した。この街道は，長尾街道の延長上にあたり，当時も利用されていた可能性が高い。なお，河内国国分寺跡は，今年度発掘調査がなされていたが，残念ながらその日は休日であったため，遺構を見学することはできなかった。

河内国国分寺跡からは，大和川に向かって坂を下り，大和川に差し掛かると，茶屋の辻の吊り橋があり，それを渡って大和川の右岸に出た。大和川がＳ字にカーブする手前に位置するこの付近は，近世では渡し船が出ていたところである。吊り橋を渡って，しばらくなだらかな坂を登ると，奈良時代の竹原井離宮跡があり，離宮跡からは，大和川を挟んだちょうど対岸に国分寺が見える。

そして，国分寺を右手に見ながら，旧道（竜田道）を東に歩き，14 時に JR 河内堅上駅に到着した。本日は，亀の瀬も越える予定であったが，猛暑のためこれ以上は断念し，踏査は終了した。続けて次回以降の打ち合わせを行い，15 時半解散となった。

関屋越えは，ほとんど山道であったが，所要時間も短く，思ったより楽に歩けた。しかし，通路としては問題ないが，道幅も狭いので，迎接道路としては，貧弱感が否めない。

第 2 回研究会〔踏査（田尻越え）〕 9 月 21 日に河内国安宿郡と大和国葛上郡の境界にあたる，田尻越えを中心に踏査を実施した。天気はくもりのち雨で，参加者は，チーム 4 名と他 2 名の計 6 名であった。

10 時に近鉄大阪線河内国分駅に集合し，河内国側からの出発となった。駅のすぐ東にある西町地蔵のところから旧道に入り，すぐに南下し，国分小学校の西を通り，まず春日神社に到着した。春日神社の境内には，田辺廃寺がある。田辺廃寺の見学には，宮司の浅田彬氏が案内をしてくれた。東西両塔の礎石・基壇を確認し，その後，宮司のご厚意により宝物庫を見学させてもらい，出土遺物の説明を受けた。11 時 40 分頃，春日神社を出発した。

ところで，田尻越えは，河内・大和国境の大和国側に田尻村があることから付けられた名称である。そのため，河内大和国境は，必ずしも峠ばかりではなく，田尻越えのように，谷間を越えていくようなルートもあった。ちなみに，関屋越えは，田尻越えのルートから北側を見上げた位置を通っている。

田尻越えが谷間に差し掛かると，近鉄大阪線や西名阪自動車道も通過しており，道が交錯している。それでも，田尻越えの旧道は，砂利道ではあるが残っていた。ただし，現在はほとんど使用されていない。

しばらく進むと，道は現在の国道 165 号線に重なり，5 分ほど車道を歩く。そして，河内大和の国境手前あたりで旧道に戻る道が現れる。旧道へ戻る道自体は，国道 165 号線ができてから，連絡路としてつくられたという。たしかにかなりの高低差があった。

田尻越えのルートに戻って下りきると，道に沿って原川が流れている。その原川を渡る石橋が現在でも残っている。このすぐ近くに，奈良大阪の府県境碑が立っている。

近鉄大阪線の旧トンネルを横目に見ながら，原川沿いを東に進み，関屋駅を目指す。途中，旧道は田尻村の集落に入る。旧道からわかれている集落前方の直線道は新しい。そして，12 時半に関屋駅に到着し，河内国分駅に戻る。これから 13 時半まで大雨となる。

田尻越えは，関屋越えよりやや時間がかかったものの，道は比較的安定し，ひじょうに歩きやすく，迎接道としても十分通用する道であるとの印象をもった。

さて後半は，次回講師招聘研究会のための準備踏査を行った。まず，安堂駅から，太平寺廃寺（智識寺跡）に向かった。東西両塔は残念ながら住宅敷地内の奥にあり，見学はできなかった。近代に移動した東塔の心礎は，石神社にある。そこから東高野街道に入り，奈良時代の木簡が出土した安堂遺跡の位置を確認した。そこからやや南下し，東に折れて少し山を登ると，老人会館がある。ここは，近世の池の石垣に転用していた安堂廃寺の礎石が出土した地点である。踏査は，14 時半頃に終了した。明日の講師招聘の研究会の打ち合わせを行い，15 時頃解散となった。

第 3 回研究会〔講師招聘公開研究会〕 9 月 22 日の 18

時から 1 号館 130 教室で行った。講師には，柏原市立歴史資料館学芸員の安村俊史氏を招き，「河内国大県郡の古代交通」というテーマで報告していただいた。参加者は，チーム 4 名を含む計 8 名であった。司会は研究代表者の竹本が行い，定刻に始まった。

まずプロジェクトチームの活動の主旨説明を行い，それから安村氏の報告となった。報告は 19 時 20 分に終わり，その後，20 時まで討論の時間を設けた。

報告内容は，安村氏の旧稿を中心に，歴史地理・文献・考古学の成果を駆使して，総合的に考察したものである。そのため質疑も活発に行われた。とりわけ集中したのは，奈良時代の竜田道のルートであった。安村説は現在ほぼ受け入れられているが，専門分野以外の史料を用いているため，その部分の確認が多かった。たとえば，『万葉集』の情景から当時の道をどこまで復元可能かという点や，河内大橋のことが記されている医王寺経の内容などである。

いずれにしても，発掘の成果が根底にあるので，説得力があり，今後我々のプロジェクトを進めていく上で，ひじょうに参考となった。

第 4 回研究会〔踏査（竹内峠越え）〕　10 月 30 日に河内国石川郡と大和国葛上郡の境界にあたる，竹内峠を越える竹内街道を中心に踏査を実施した。天気は晴れ時々くもりで，参加者は，チーム 3 名であった。

近鉄南大阪線上ノ太子駅に 10 時半に集合し，六枚橋付近から竹内街道に入る。上ノ太子駅から六枚橋付近までの道は，大坂越え（穴虫越え）と竹内街道を繋ぐ間道である。六枚橋付近から山田の集落をしばらく歩くと，孝徳天皇陵がある。この付近は，王陵の谷と言われるほど，陵墓が集中している地域である。

街道に戻り，街道沿いにある太子町立竹内街道歴史資料館を訪れた。資料館では，常設展を見学し，竹内街道を含む南河内の街道の通史的状況を確認した。

資料館を出発し，途中歩道のない車道を通りながら峠を越えて，再び旧道に入る。しばらく歩くと，南阪奈道路ができたことにより，新しい側道なども見られた。しかし，旧道もしっかりと残っており，道に沿って川も流れていた。集落の近くまで来ると，池のところで一旦車道を通り，集落入口の神社のところから，再び旧道に戻る。そこからはほぼ直線で，竹内の集落を東に進み，14 時に綿弓塚の展示休憩所で休憩した。竹内峠越えは，その先で終わり，道路を渡った長尾集落付近からは横大路が始まり，また長尾街道とも交わる要衝となる。一行は，長尾神社のところで北に折れて，近鉄南大阪線の磐城駅から香芝市二上山博物館へ向かった。

博物館では，特別展「聖徳太子と信仰の道――太子道・斑鳩と磯長を結ぶ道――」が催されており，題名の通り，本プロジェクトと密接な関係があり，参考になった。近世の太子道のルートは明らかとなっているが，それがどこまで溯りうるかが今後の課題であろう。博物館を出て，次回の打ち合わせの後，踏査は終了した。

竹内街道は，現在の堺から通じて，難波大道と交差し，峠を越えると，横大路と直結する直線道路といってよい。その点からすれば，古代国家が力を注いで造りあげた幹線道路であるといえる。また，古代に限らず，時代を通じて主要な道路として用いられたことも間違いない。しかしながら，ほかのルートと比較して，峠の標高が高いのは難点である。

第 5 回研究会〔踏査（大坂越え）〕　11 月 4 日に竹内峠の一つ北側のルートに位置する大坂越え（穴虫越え）を中心に踏査を実施した。天気は快晴で，参加者は，チーム 3 名であった。

近鉄南大阪線上ノ太子駅に 10 時 45 分に集合し，すぐに大坂道に入り，穴虫峠を目指す。11 時半頃に穴虫峠に到着し，そこから下って，11 時 46 分に田尻越えからくる道との交差点にあたる穴虫の分岐点に出た。峠越えは，約 1 時間を要したが，峠の標高もそれほど高くなく，比較的道幅もとれる迎接にも適した道であるとの印象をもった。

つぎに，7 世紀後半以来の「大坂関」があると推定されている地域をめぐった。大坂関の一つの候補地は，郡ヶ池あたりで，もう一つの候補地は大坂山口神社近辺とされている。一行は，まず穴虫の交差点から竹田川沿いを進んだ。竹田川沿いは，後世の太子道に推定されており，この道がいつの時期まで溯るのかが問題であろう。しばらく行くと，右手に見える新興住宅街が川沿いに迫ってくる。ここから左側（北側）の段丘を登ると，郡ヶ池があり，新興住宅街をこえた先に，大坂山口神社がある。

前者は，以前の航空写真と比較しても，それが人工的なものか自然のものかの区別がつかないが，後者は，神社域が丘状になっていて，丘の中央の谷筋に沿って空間が広がっており，現在は細い道も通っている。またこの丘は，田尻峠へ向かう道と穴虫峠へ向かう道に挟まれた重要な場所に位置しており，大坂関がこの付近にあった可能性を示唆している。

以上が 5 回の研究会の概要である。いずれの山越えも，地図で見るより，実際に歩いたことで，距離感や疲弊感などの実感をもてた。また，外国使節が見たであろう風景も確認でき，迎接道としてのルートを再考するためのよい判断材料となった。あと 2 回ほどの踏査と講師招聘研究会を残している。講師は現在依頼中である。

なお，柏原市歴史資料館編『夏季企画展展示図録 裴世清の見た風景――1400 年前の大和川――』（2008 年 7

月）に寄稿した「遣隋使と冠位十二階の制定」（竹本執筆）は，本プロジェクトの成果の一部である。

4．田原憲和「ルクセンブルク語コイネー（共通語）研究会」

研究協力者：ジャン・クロード・オロリッシュ（上智大学副学長），小川敦（ルクセンブルク国立研究所客員研究員・一橋大学），木戸紗織（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

2008年11月現在，本研究プロジェクトにおいてすでに二度にわたる研究会を開催した。それぞれの詳細は次の通りである。

2008年度 第1回ルクセンブルク語コイネー研究会

（参加者7名）

2008年8月9日（土） 於：大阪市立大学学術情報センター10階会議室

報告1：田原 憲和「ルクセンブルク語の「発見」とディックス・レンツ正書法」

報告2：小川 敦「第二次世界大戦以降のルクセンブルク語とルクセンブルク人意識 ――単一言語性か多言語性か――」

報告3：木戸 紗織「ルクセンブルクにおけるアイデンティティのグローバル化とローカル化」

2008年度 第2回ルクセンブルク語コイネー研究会

（参加者6名）

2008年11月8日（土）大阪市立大学高原記念館特別会議室

報告1：木戸 紗織「ルクセンブルク語版Wikipediaに見るルクセンブルク人アイデンティティの表出」

報告2：小川 敦「ルクセンブルクにおける言語意識言説の二面性 ――戦後期の特異性（そして連続性）とは何か――」

報告3：田原 憲和「ルクセンブルク語コイネーと正書法」

それぞれの報告では，とりわけ次の点について重点が置かれ，議論された。

（木戸報告）

ルクセンブルク人のアイデンティティは複雑であり，グローバルかつローカルなアイデンティティが表裏一体となっている。ルクセンブルク人は『ヨーロッパ人意識』がとりわけ高いとされるが，それはすなわち『自国民意識』が低いということにはつながらず，その逆もまた然りであることはユーロバロメーターの統計から推し量ることができる。

共に国内で複数の言語が公的に使用されているという点で隣国のベルギーとの共通点を見出すことができるが，地域によって使用する言語がほぼ明確に分かれているベルギーに対し，ルクセンブルクでは全ての国民が三言語を用いて生活している。このことから，母語と複数の外国語を使用するというルクセンブルクの言語的多様性がヨーロッパ人意識を生みだしたのではないかという仮説を立てることができる。

また，ルクセンブルクはEC以来の原加盟国であり，現在においても多くのEU機関がルクセンブルクに存在する。そのため，ルクセンブルクという国家はすでにEUと切っても切り離せない深い関係にあり，ルクセンブルク人意識が統計上数値に表れにくいとも考えられる。

ルクセンブルク人意識が希薄ではないということの証左として，Web上のフリー百科事典であるWikipediaのルクセンブルク語版は，同規模の話者を有する他の言語と比較して非常に活発に更新されている。このようなルクセンブルク人としての意識が徐々にではあるが確実にルクセンブルク人に根付いてきている。

（小川報告）

ルクセンブルクにおける言語意識が語られる際，いわゆる母語意識と外国語使用の意識が持ち出されてきた。この2つの方向性を持った言語意識は，ともにバランスを取りながら保たれてきたが，ナチス・ドイツから解放された第二次大戦後は，ドイツに対する反感から単一言語性の方に偏ったと言える。そういった中，ルクセンブルク語とルクセンブルク人の独自性を前面に出したロベール・ブルッフのイストヴェオーニエン理論は，ルクセンブルク語に存在意義を与えただけではなく，ルクセンブルク人に本来備わった独仏文化圏の橋渡しをする役割，すなわち独仏語使用にも意義を与えたと言える。

この後，ルクセンブルクは小国であるにもかかわらず欧州統合の中心的な役割を随所で果たしていくことになるが，ブルッフの理論はいくぶん刺激的であったが何らかの役割は果たしていたと言える。

（田原報告）

1829年にその原型が出され，1854年に発表された初のルクセンブルク語正書法，いわゆるマイヤー正書法は激しく批判されることとなる。マイヤー正書法の欠点として，言語学の理に適っていない，（ルクセンブルク語は本来ドイツ語の方言の一部であるにもかかわらず）ドイツ語からの外来語とルクセンブルク語固有の語彙を区別する根拠に欠け，しかもその基準が示されていない，などの点について指摘したのがペーター・クラインとディックスであった。翌年の1855年にディックスは自らの正書法を発表し，比較的広く用いられることとなった。ディックスはルクセンブルク語の豊かな音韻をすべて文字化することを試みたため，多くの補助記号を用いることとなった。しかし，ディックス

正書法オリジナルの補助記号も含まれており，これは印刷には向いていなかった。そのため，ほとんどの補助記号を排除した簡易版正書法が印刷言語として用いられるようになった。

ディックスの正書法が広く用いられた要因には，ディックス自身，そしてディックス正書法の推進に力を貸したミシェル・レンツらの作家としての権威，そして彼らの愛国心が挙げられる。彼らの成果は後の言語活動家であるシュポーやケーニヒに受け継がれることとなる。

総括

それぞれの報告は，ルクセンブルク語とルクセンブルク人意識について異なる視点からの分析であり，参加した独文専攻大学院生らからも多くの質問が寄せられ，活発な意見交換が行われた。とりわけ，ルクセンブルクにおける言語と民族意識，言語と国民意識については欧州の他のどの国とも異なる複雑かつ特徴的なものがあるため，多くの参加者の関心につながった。この研究会で行われた報告や議論を基に，2008 年 12 月 13 日にシンポジウムの開催を予定している。

５．広瀬美千代「都市部の小学校における福祉教育実践過程の検証――教師に対するインタビュー調査から――」

１．研究背景と目的

現在，小学校における「総合的な学習の時間」の創設で「生きる力」の育成が目標に掲げられているが，2007 年 11 月，中央教育審議会で総合学習の時間を削減する見通しとされており，教育現場に混乱が生じることが予測される。

このようなことから，小学校や地域における福祉活動を通じて「福祉マインド」を形成していく目的で，大阪市においては小学校区協議会による「はぐくみネット」といった取り組みが導入され，学校と地域をつなぐ観点で学校教育に対する支援や研究が行われている。これらの実践内容として教育目標や教育内容の情報発信，学校行事，授業公開等の実施が取り組まれている。

しかしながら，その実態や効果の程度があいまいで，各学校によりその実践の程度もまちまちで具体的な実践論や方法上の理論に裏付けられているものではない。地域福祉の主体は地域の住民と学校内における教師による教科や総合学習の時間における取り組みに分類される。門脇（1989）は子どもの社会力を育むもっとも重要な場は学校ではなく地域社会であると述べているが，これが効果を得るためには，「はぐくみネット」のような組織化された実践課程が必要である。しかし，子どもの肯定的自己受容感の形成に関連する重要な他者は，共に学ぶ仲間や教師であるといった見解もみられる。

このことから，教師は子どもにとって指示的な存在はなく，教師と子どもとの相互作用的な環境を作り出すことによって，子どもどうしのコミュニケーションを促し，より子どものアイデンティテイを確立し，個々の問題解決能力を高め，共同的な学習の場を提供していけるような存在である必要があるといえる。知識を得て実践を促す過程に，相互関係におけるコミュニケーションによる言葉の果たす役割があり，それが学習の環境を作り出していくことであるとすれば，このような考えは，社会構成主義の立場に立った学習理論であるといえる。教師からの同じ言葉がけが，子ども各々にとって受け取る意味が異なり，作り出す世界が違うという意味においてもそうである。他者を思いやる気持ち，他者の問題を共に考える姿勢，ひとつの事例を自分自身のことにあてはめてその意味を考える能力などはすべて子どもの「福祉マインド」や生きる力を育成することに通じるのである。

小学校における教師の側からの子どもに対する働きかけが子どもに与える影響が大きいことから，教師のもつ価値観や福祉に対する考えがどのようなものであり，福祉教育実践にどのように反映されているかを知ることが必要な作業であり，福祉教育実践における課題を抽出するという点において意義がある。

本研究においては以上のような研究の観点から，都市部における小学校の教師が日常のカリキュラムにおいて実践する福祉教育の実践度を明らかにすることとする。

「福祉マインド」育成を促進する要因および阻害する要因を教師に対するインタビュー調査を通じて抽出し，ナラティヴ分析により明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

研究内容として，研究趣旨を理解してもらった都市部の小学校教員（他，中学校および高校教員）約３～５名に対して，以上に記載した観点にそったオープンエンドのインタビューを２から３回行う予定である。方法に関しては，「教科や総合的学習の時間等における児童と教師の相互作用から『生きる力』育成において有効である点，心がけている点や困難な点についてお聞かせください」という趣旨のリサーチクエスチョンに沿って半構造化面接を行い，語りのすべてを I.C レコーダーに録音する。また筆者自身が観察した教師の表情や面接場面での感想などをフィールドノートに随時記録することとする。

倫理的配慮としては，研究対象者には研究の目的，意義について説明し，調査協力による不利益を被らないこと，プライバシーの保護，途中でのインタビューの中断および中止ができること，研究終了後にはすべ

てのデータを処分することなどについて口頭と文書で説明した上で，承諾を得て誓約書に署名，捺印していただくこととする。

３．現時点における研究の状況

主に 2008 年度は文献研究を中心にして，⑴福祉教育における概念整理，⑵大阪市で実践されている福祉教育，生涯教育等の概要，⑶小学校における「総合的学習の時間」の現状と課題，⑷教師の取り組みの例，に関して整理を行っている。

それと同時に，都市部にある小学校ですでに地域における障害者施設との交流を通じて児童に福祉マインドを育成していくことを意識して実践に移している教員に関してもその内容に関して話を伺っているところである。ここでの語りといまだ実践に至っていない教員との語りから今後の福祉教育実践の課題が抽出できることを期待している。調査対象者となる教員（主に小学校教員であるが，比較考察として中学校，高校教員へのインタビューも考えている）を選択中であり，調査予定時期は学年末である 2009 年 3 月を予定している。

文献整理の概要

⑴　福祉教育における概念整理（定義）

☆ 1970 年から 1980 年にかけての理論的な検討が行われた。

・「福祉教育についての関心と理解を深め，社会福祉への主体的な参加と協働を促すことを目的とする教育活動の総称」。【山縣文治，柏女霊峰　社会福祉用語辞典，第4版】

・「様々な価値観を前提としながらも“人権”を守るものとして日常生活における不断の努力を媒介にし，“社会福祉”を焦点とした実践教育とする」【一番ヶ瀬康子，大橋謙策，学校における福祉教育実践Ⅰ――保育所・幼稚園・小学校――，シリーズ福祉教育第2巻，1998，光生館】

・大橋は「地域福祉の主体形成」という観点から問題を明確化した。【大橋謙策「地域福祉の主体形成と社会教育」『社会教育の福祉教育実践』1997，光生館】

・一番ヶ瀬は「福祉教育」における3つの偏りを指摘した。①宗教教育で解消させる傾向，②素朴な援助活動のみで終わらせる傾向，③生活教育としての展開に傾斜する傾向などを指摘し，日常生活において社会福祉実践をいかに創造していくかという自主的なあり方の展開を欠くとした。また，「福祉教育の理論と展開」【シリーズ福祉教育第1巻，1998，光生館】においても「‥‥すべての教科からの福祉教育への接近が必要であるとともに，すべての教科の応用に福祉の視点がつらぬかれ，総合化されていく方法が常に模索されていく必要がある。‥‥教育現場の体制づくりをどう創出するかということが常に問われていく必要がある。‥‥」とある。

以上のような指摘は，本研究の視点である教師から児童に対する福祉教育を実践するうえでの具体的な働きかけが重要であるという根拠となると考える。

⑵　大阪市で実践されている福祉教育，生涯教育等の概要

研究背景で述べた取り組み以外に，例えば大阪市教育委員会では，平成 16 年度の「今後の生涯学習施策のあり方について」において，学校教育で学校を卒業した後も直面する課題に対応するために学ぶ力である「自己教育力」を高めていくための取り組みの必要性をうたっており，総合的学習の時間などを利用することが奨励されている。しかしながら実施主体，実践方法の具体的取り組みに関しては，各学校にゆだねられており，そのフィードバック等の報告や課題抽出に関しては，状況を把握できる文献がほとんど得られないのが現状である。

以下，⑶小学校における「総合的学習の時間」の現状と課題，⑷教師の取り組みの例に関しても文献および聞き取りを中心に論点を整理している。今回は紙面上，上記の報告に留めたい。なお，『都市文化研究』へは，文献研究は「資料」として，またインタビューの分析内容は論文として投稿する予定である。

６．古野貢・村井良介「戦国期畿内政治史および都市史を再検討するための軍記資料『細川両家記』研究」

＊研究協力者；藤本史子（大手前大学），藤本誉博，稲垣翔（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

はじめに

本研究の目的は，近年急速に進展している戦国期畿内の政治史および都市史研究において頻繁に利用されてきた『細川両家記』の史料批判を通じて，新たな戦国期畿内研究の視点を提示することにある。そのために複数の写本の校合作業・書誌学的検討，および記録史料・一次史料との比較や考古学的成果からの検討を行っている。

1，検討作業

①写本の校合作業

すでに昨年度までに，一般に知られている群書類従本『細川両家記』と，国会図書館所蔵『細川両家聞見事記』を参照しながら，この両者の校合作業，および他の記録資料や一次史料との比較検討を行ってきた。その成果として，群書類従本『細川両家記』と国会図書館所蔵『細川両家聞見事記』との間には，かなりの部分で記述・表現の違いが存在することを確認できた。国会

図書館本にはある表現が，群書類従本にはないということなどである。このような点は，テキストとしての『細川両家記』が成立する過程で，1）異なる原本からそれぞれ書写した，2）そもそも作成の過程に相違がある（たとえば一方は写本，もう一方は複数の本から記事内容を取捨選択し，作成した）などの可能性を指摘できる。しかし写本の数を増やし，より厳密に記述内容・表現などを検討しなければ確定的な判断を下すことはできない。

そこで本年度は，上記２種類の本（A「群書類従本」，B「国会図書館本」）に加え，C「内閣文庫所蔵『聞見事記』」，D「内閣文庫所蔵『正禄間記』」，E「内閣文庫所蔵『三好記』」，F「内閣文庫所蔵『細川両家聞見事記・三好記・三好別記』」，G「宮内庁書陵部所蔵『三好記』」，H「内閣文庫所蔵『二川分流記』」，I「慶応大学所蔵『二川分流記』」の７種の写本を用意し，これらを校合することにした。研究会に出席するメンバーがそれぞれ同一箇所を担当してレジュメを作成し，原本（コピー）と校合作業を行っている。研究会はほぼ毎週開催し，検討作業を進めているが，作業は思った以上に時間がかかり，いまだ全体の１／４程度しか進んでいない。

しかしこれまでの作業の経過から，おおむね以下のような傾向を見出すことができる。1）B「国会図書館本」は他の写本とは著しく異なる箇所が多い。その差は，書写のミスでは処理しきれない差異を確認することができ，原本が他の原本の系統と異なる可能性を示唆する。2）『三好記』とのタイトルが付いたＥ～Ｇには表現や書き漏らしなどの共通点が多い。写本により，作成された年代も異なるが，同一の原本（に近いもの）をもとに作成された可能性が高い。3）H「内閣文庫所蔵『二川分流記』」，I「慶応大学所蔵『二川分流記』」は，地の文にカタカナが使用されているところに大きな特徴がある。

もちろん詳細にみれば，2）で整理したＥ～Ｇ内部にも差異は存在する。しかしおおむねこの３種類の特徴を指摘することができよう。

ただし，写本の校合作業は，以上９種の校合作業で完結するわけではない。確認できている写本は，他に少なくとも数種類存在する。現在作業を進めているＡ～Ｉの校合作業を完了させたのち，これらの写本との校合作業を行う必要がある。

②書誌学的検討

『細川両家記』の書誌学的検討は，十分に進んでいない。それは①写本の校合作業の進捗状況と関連する。少なくとも現在知られている写本の全体像を把握しないままで，写本の系譜関係などを確定することはできない。さらにこうした検討を行ううえで，文章表現や字句の異同などをどこまで組み込むかという方法論の点にも検討の余地がある。テキストとして確定するために，国語学的な検討作業を組み入れるか否かについても今後の課題である。

③記録史料・一次史料との比較

『細川両家記』は，その記述の豊富さから戦国期畿内政治史を物語る重要な資料とされてきた。しかしその内容は，記主の主観，あるいは偏った情報に影響されてか，同時期におこった重要事件などについて記していない事柄が多い。たとえば河内の畠山氏や近江の六角氏といった，同時代に細川氏をはじめ室町幕府―守護体制のもとで活動した諸勢力の動向については，あまり記されていない。こうした欠を埋めるために，一次史料や記録史料を用い，『細川両家記』の記事の相対化を図っている。このような作業と校合作業を併せて行うことで，より確実な歴史事象を明らかにできる。なにより『細川両家記』の記述の間違いを補うことが可能となり，より良質なテキストに近づけることが可能となる。

④考古学的成果からの検討

各地で行われている発掘調査の成果を可能な限り早く入手し，その成果を『細川両家記』の記述と照らし合わせ，より蓋然性の高い成果を追求している。特に都市部における発掘調査では，重要な発見が期待できる。その一方で行政発掘などは件数や範囲，予算などが規制され，期待するほどの成果を上げられていない。戦乱等による焼亡の範囲，洪水や地震など自然災害の爪痕など，都市部におけるさまざまな関係を明らかにできるのが考古学的手法であり，今後も協業を進める必要がある。

２．今後の予定

①以上の作業をさらに進展させる。特に写本校合作業は，まだ積み残しのものもあり，調査を行うことに加え，校合作業をより合理的，かつスピーディーに進めるため，一層の努力と工夫を行う必要がある。

②これまでの作業の成果を明らかにし，戦国期畿内政治史や都市史研究における『細川両家記』の相対化を目指すために，１月末に以下の５名の報告を軸に，シンポジウムを開催する（報告タイトルは仮題）。

「細川氏権力と『細川両家記』」（古野貢），「三好氏権力と『細川両家記』」（天野忠幸），「畠山氏権力と『細川両家記』」（小谷利明），「六角氏権力と『細川両家記』」（西島太郎），「『細川両家記』の書誌学的検討」（藤本誉博），「近年の発掘成果と『細川両家記』」（藤本史子）。いずれも戦国期畿内政治史や都市史を描くうえで，『細川両家記』をテキストとしていかに利用出来るか（出来ないか）を主たる観点として報告を行う予定である。なおこのシンポジウムの報告内容の事前検討会を 12 月

末に開催する。

③写本の校合作業などを終了させなければならないが，これまでの取り組みを形として残し，一般への情報提供と成果公開のために，1）テキストとしての『細川両家記』の作成，2）研究論文などの執筆，3）これまでの作業で新たに判明した人名・地名などの一覧表を作成し，刊行する。

以上を今後の予定とし，作業をすすめることとする。

7．松田いりあ・梁仁實・佐野明子・川口夏希「現代都市とファッション文化のコンタクト／コネクト」

本プロジェクトの趣旨

「ファッション社会学研究会」を組織し，外部からも積極的に参加者を迎え，当該分野における第一線の研究者から報告を受ける形で活発な研究活動を開始した。

ファッション研究分野における本研究プロジェクトの特徴は，文化社会学，文化研究，都市社会学，社会地理学，政治経済学など，社会科学の理論的蓄積を積極的に利用しつつ，それらと，広告，ファッションメディア，ジャーナリズム，デザイン，アパレル，流通の現場に通暁する専門家の知見との接続可能性を探求する点にある。

「都市とファッション」をめぐる問題設定は，従来，「都市問題というハードな現実／イメージやソフトとしてのファッション」という二分法にとらわれがちであった。本プロジェクトでは，この問題設定に含まれる，ファッション生産の現場におけるスウェットショップの存在から，脱工業都市におけるサービス産業（流通・販売，メディア，IT）としてのファッション産業の展開にいたるまでの広範なテーマを再検討し，ファッション研究におけるアジェンダを再設定し，将来的には，報告書および出版物の形で成果を世に問うことを目指している。

本プロジェクトの経過

本研究プロジェクトでは，この中間報告までに1回の研究会を開催しており，今年度内にさらに2回実施する研究会の日時・報告者を決定している。

第1回　2008年8月9日（土）
午後3時30分〜5時30分

報告タイトル：「1970年代以降のファッション雑誌をめぐって」
報告者：難波功士（関西学院大学社会学部教授）
場　所：大阪市立大学文化交流センター
参加者：19名（報告者含む）
報告要旨：

第1回研究会は，まず，1970年代以降のファッション誌を考えるための「先行研究」の紹介が行われ，「ジェンダー研究としての雑誌研究」，「メディア史研究としての雑誌研究」，「送り手側からの雑誌研究」という三つの視点が示された。その上で，「誌面は社会意識の反映か，文化産業・意識産業による操作か」というテーマに関して，とりわけ創刊点数が多く興廃の早いファッション誌ないし若者誌を取り上げて「『創刊』という行為の意義」が再検討された。

つぎに，「創刊の社会史」として，『an･an』から『小悪魔ageha』までの創刊をめぐる経緯が，出版戦略，先行誌などとの関連を中心に，詳細な一次資料とともに報告された。

最後に，「『創刊』の社会史的･社会学的含意」として，報告者の近著（『族の系譜学』，青弓社，2007年）との関連で，その射程内の延長と思われる問題と，射程外の論点への言及がなされた。前者に関しては，「リブ誌の不成立等」（ジェンダー），「ニューファミリー（世代）誌の挫折と階層誌化」（世代），「ヴィジュアル化，セグメント化，アドバトリアル化等」（階層）といった問題が取り上げられ，後者については，「ローカリゼーションとグローバリゼーション」，「モデルから読者モデルへ」，「（階層）再生産と雑誌」，「『成熟』よりも『若さ』を価値とする社会」をはじめとする論点が紹介された。

第2回　2008年11月8日（土）午後2時〜5時

報告タイトル：「1970年代以前のファッション雑誌をめぐって」
報告者：井上雅人（京都精華大学人文学部准教授）
場　所：大阪市立大学文化交流センター

第3回：2009年1月24日（土）午後2時〜5時

報告タイトル：サブカルチャーとファッション
報告者：成實弘至（京都造形芸術大学芸術学部准教授）
場　所：大阪市立大学文化交流センター

8．川口夏希「大阪市阿倍野地区における新しい都市空間創出に関する連続的オープンフォーラム計画」

本計画では大阪市阿倍野地区に着目し，フレキシブルな民間資本による都市再生の動きについて，人的資源に着目することにより，その仕掛けや仕組みを明らかにする。同地区では，阿倍野筋西側の官主導の大規模な再開発，東側の百貨店が牽引する民間主導型の開発と小資本経営者の参入，昭和町・阪南町界隈の地元住民の手による長屋とそのリノベーションを活用したまちづくりの取り組みといった三者三様の空間変容が隣接したエリアで同時に進んでいる。申請者はこうしたベクトルの異なる都市再生の担い手を招いたオープンフォーラムを実施し，新たなネットワークづくりに資するものとして位置づける予定である。今後，阿倍野の研究を進め，大阪市内の他地域（福島，中崎町）や他都市（東京，福岡）の事例を積み重ねることにより，博士論文執筆を進めていく。

申請者はこれまで，①住宅地図の活用とフィールド調査により，同地区の変容過程を辿り，②阿倍野の生態と更新の系譜を明らかにする作業の一環として，異なる立場のキーパーソンとのネットワークづくりと地区の歴史の掘り起こしを目的としたスタディツアーを行っている。下記①，②の調査結果は 2008 年 11 月 9 日に開催された人文地理学会大会で発表した。今後，学術論文を執筆する。

①「阿倍野区の変容過程の調査」

まず，近鉄百貨店が牽引する開発と，小資本経営者による自然発生的な空間変容の動きが見られる阿倍野筋東側（阿倍野筋 1 ～ 2 丁目，松崎町 2 ～ 3 丁目）を取り上げた。2008 年 8 月 30 日から 9 月 1 日にかけてフィールド調査を行い，その後住宅地図と照合することによって同地区の 1988 年 - 1998 年 - 2008 年の間の変化を明らかにした。その際，和歌山大学観光学部の学部生の調査協力を得た。その結果，1998 年から 2008 年にかけて，とりわけ大きな変化が起こっていることが確認された。その変化としては，近鉄グループのファッションビル「阿倍野 Hoop」と「& and」周辺の商業施設の増加，大型マンションの建設，大通りから裏へと入った戦災を免れた好適な住宅地や入り組んだ路地中でカフェや美容院といった小規模でデザイン性の高い外観を備えた店舗の出現が挙げられる。2008 年 11 月後半は，長屋のコンバージョンとリノベーションが行われている阿倍野区の南部，昭和町・阪南町・松虫通界隈でも同様の作業を行う予定である。

②「阿倍野オープンフォーラム」

予定していたオープンフォーラムについては，ディスカッションの場を屋外に設定し行っている。異なる立場に属する阿倍野再生の担い手を招き，阿倍野地区のスタディツアーを行い，同地区の歴史を掘り起こすとともに，現状の評価を行っている。今後，ツアーと議論を蓄積させた後，その集大成として室内（西成プラザあるいは高原記念館）を会場としたフォーラムディスカッションを行うこととする。

第一回目は，2008 年 11 月 7 日に主に松崎町周辺を対象に行った。ゲストとして，福岡美彦氏（有恒会），山下雅洋氏（阿倍野ベルタ商店街振興組合），中井公一氏（近畿日本鉄道㈱ ターミナル開発事業本部）・西矢里子氏を招き，主催者側として，申請者の他に都市研究プラザ水内教授，黒木研究員，文学部学部生である島崎雄貴氏が参加した。

対象地区である松崎町（主に 2 ～ 3 丁目）は阿倍野区の中でもかつて邸宅街として知られた地区である。ゲストの一人の福岡氏は，同氏が少年であった，戦後まもなくの松崎町について「近寄りがたい家がようけあった」と述べている。「住むのが夢のまた夢のような」門構えの大邸宅がひっそりと立ち並ぶ地区だったようである。そして 1942 年の航空写真と 1958 年の住宅地図を手に対象地区を歩く中で，当時の邸宅のいくつかが現存していることが確認された。加えて，旧来の地区の姿を知る参加者と街を歩くことによって，地図上には表されない地区の歴史を明らかにすることができた。一方，松崎町 4 丁目界隈には瀟洒な文化アパートや邸宅長屋が残っており，隣接する文の里 1 丁目は大阪工芸高校を擁している。昭和初期のホワイトカラーに選好された好適な郊外住宅地という阿倍野区の特性と地域の資産が再認識された。今後，こうした地域のポテンシャルをどう活用し，地域を発展させていくかが課題となってくるであろう。

また，今回のスタディツアーを企画・開催する中で，研究者，地元財界人，開発関係者，商店街関係者が出会い，近鉄グループの開発や，商店街の今後について様々な立場から活発な議論が行われた。こうしたネットワークは申請者の研究のみならず，今後の阿倍野開発にとって一助となることが期待されるものである。

今後，対象地域を増やして同様のスタディツアーを複数回開催し，第二回目のツアーとしては阪南町・昭和町界隈を予定している。同地区では，都市研究プラザ黒木宏一研究員がメンバーを努める ASSU の会が活動しており，申請者もこれに参加している。同会との連携を視野にいれた活動となるであろう。

９．柴田剛「マイノリティとされる人々の「語り」から見る「場所」の記憶――和泉市幸地区に居住する在日コリアン高齢者の体験と語りから――」

研究の関心・目的

大阪府和泉市幸地区は旧南王子村以来の系譜を持つ被差別部落であるが，同時に戦前から朝鮮半島出身者が集住して来た地域でもある。被差別部落の領域と在日コリアン集住地区がほぼ重なっており，マジョリティの側から見れば，二重の意味で周縁的な場所であるということが出来る。また，この地域にはかつて運動団体や市民グループなどの調査が入っているが，研究者による調査があまり入っておらず，そういう意味ではこの地域の調査・記述それ自体に意味があるのではないかと考えているし，また，二重の意味で周縁として位置付けられた生活世界から見た「地域」や「場所」にまつわる「記憶」を記述することによって，オルタナティブな「地域（史）」を描くことの可能性を考えている。

調査方法は，「場所」や「地域」にまつわる「記憶」が主たるテーマであるので，在日コリアン高齢者に対する聞き取り調査が中心となる。具体的には，和泉市に開設された在日コリアン高齢者向けの福祉施設（「街

かどデイハウス」）である「ムグンファハウス」（在日本韓国民団和泉支部が管理･運営）と「同胞長寿マダン」（朝鮮総連泉州支部が管理・運営）を利用する在日コリアン高齢者の皆さんに対して，生活史や「地域」との関係について聞き取り（インタビュー）を行なってゆく。また，在日高齢者向け施設の利用者は女性が多くを占め，施設利用者に対しての聞き取りだけでは，「記憶」や「体験」のバイアスが大きくなると思われるので，福祉施設利用者以外への聞き取り（インタビュー）も行なってゆきたいと考えている。聞き取り調査は主に調査者／個別のインフォーマントの１対１の形式で行なっている。また，可能であれば何人かのインフォーマントにご自身の「体験」や「記憶」を語って頂き，それに対して聴衆として参加して頂く方々（地域住民，外部者など）からコメントや質問を出してもらう形で「場所」にまつわる「記憶」の「共有」を目指す様なフォーラム的な集まりを１回は開催したいと考えている。

いずれにしても，「聞き取り」による「記憶」や「体験」の記述や再構成が中心的な方法となるので，当然のことながらインフォーマントの語る「記憶」や「体験」に不正確な部分が出て来ることはあり得るが，こうした「記憶」の「揺らぎ」による不正確さにこだわるのではなく，むしろひとつの「体験」や「記憶」が更なる「体験」や「記憶」を呼び起こす可能性を信じてみたい，と考えている。

当プロジェクトにおいては，「場所」／「記憶」に関する理論的な検討よりもむしろ，個別的な事例の蓄積を目的としており，成果の発表についても記述的なものになると思われる。特に，戦時中や戦後直後の状況を実際に体験して来た様な在日コリアンの方々が極めて高齢化しており，そうした「体験」や「記憶」を風化させないためにも，まずは今回のプロジェクトで対象とする和泉市幸地区に居住する高齢在日コリアンの方々の「体験」や「記憶」を少しでも残すことが必要だと考えているためである。

研究の進捗

７月から９月上旬にかけて，「ムグンファハウス」及び「同胞長寿マダン」の利用者に対して，インフォーマントの皆さんご自身の「生活史」や「記憶」に対する聞き取りを行なった。聞き取りに際して，こちらからの不躾な質問や問いかけがあったにも関わらず，インフォーマントの皆さんには自らの「体験」や「記憶」を語って頂き，「生活史」として興味深い事例を語って頂いた。実際に聞き取りに応じて下さった在日高齢コリアンの皆さん，並びに聞き取りの許可を下さった「ムグンファハウス」及び「同胞長寿マダン」のスタッフの皆さんには非常にお世話になっており，記して感謝の意を表わしたい。

現時点では，12 人の方に「生活史」の聞き取りを行なっているが，こうした聞き取り結果を基に，対象地域である和泉市幸地区の在日コリアン高齢者の「記憶」／「場所」の問題について記述を行ない，最終的には学術雑誌への投稿を行なう予定である。なお，すでに聞き取りをした方々の「生活史」に関して，2008 年度人文地理学会大会一般発表（11 月９日，於筑波大学）において「「場所」をめぐる生活者の「記憶」／「物語」」というタイトルで行なった発表の際に事例として引用した。ただし，当プロジェクトに関しては，「記憶」や「体験」の記録を意図している部分もあるので，すでに聞き取りを行なった「生活史」についての分析・考察と平行してさらに聞き取りを行ない，なるべく多くの「記憶」や「体験」の蓄積を目指してゆきたい。

「フォーラム」については，報告書執筆時点では詳細は未定であるが，当事者としてインフォーマントとなって頂いた方々にご自身の「記憶」や「体験」を語って頂く場を設定すべく，「ムグンファハウス」や「同胞長寿マダン」のスタッフの方々や指導教員に相談し，助言を仰ぎつつ「場」の設定を考えてゆきたい。また，インフォーマントとなって頂いた方々ご自身に「記憶」や「体験」を語って頂くことがむずかしい場合でも，何らかの形で対象地域の在日高齢コリアンの「記憶」や「体験」について考える「場」を設定したいとは考えている（この場合は，対象地域の状況に詳しい在日高齢者向け施設のスタッフなどに報告者，あるいは情報提供者としてご協力頂ける様に依頼，交渉してゆくつもりである）。

その他

以下で触れることは当プロジェクトそのもので扱う事象ではないが，当プロジェクトの中心である在日高齢コリアンの皆さんに聞き取りを行なうという経験を通じて出て来た関心である。

①在日高齢者向け施設そのものについて

「人間」に対する関心ではなく，施設そのものに対する関心であるが，施設の設立に至る過程や意図，あるいは民族団体における位置付けなどに対しても関心を持っている。

②「記憶」／「場所」の理論的考察

もともと，おぼろげながら関心を抱いていたのであるが，当プロジェクトは「記憶」や「体験」の記録・記述が目的の中心となる。そうした具体的な「記憶」や「体験」を扱う中で，「記憶」／「場所」の関係やそうした「記憶」に関わる「人間」との関係について，改めて関心を抱く様になった。この側面について，可能な限り理論的な考察を行なって行きたいと考えている。

以上，「その他」の部分で述べたことは当プロジェク

トの中で解決しようというものではなく，むしろプロジェクトとの関わりの中から出て来た「宿題」として考えている。この「宿題」の部分についても何らかの形で成果を出せる様にすることを目指してゆきたい。なお，②については，『空間･社会･地理思想』12 号（本学地理学教室発行）への掲載を目指している。

10. 山崎竜洋「近世都市史研究の方法を学ぶラウンドテーブル」

研究協力者：久角健二･石岡知久･西本菜穂子（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

研究プロジェクト「近世都市史研究の方法を学ぶラウンドテーブル」は，近世都市史研究･地域史研究をリードしている吉田伸之氏（東京大学）を招き，近世都市史研究・地域史研究に対する理解をすすめるためのラウンドテーブルを開催することを計画している。

このラウンドテーブルでは大学院生を中心とするメンバーが各自の研究に関連する吉田氏の研究をとりあげ，各自の研究に関連させた報告を一人 20 分ほどおこなうことを計画している。そして，その趣旨をもとに質疑応答をおこなうことで，吉田氏のこれまでの研究・方法についてだけでなく，近世都市史研究・地域史研究の現状・方法について理解を深めることができると考えている。

現在ラウンドテーブルに向けて，日本近世史を専攻する大学院生を中心として吉田氏のこれまでの研究成果を学ぶための論文輪読会をおこなっており，2008 年 11 月現在までに 3 回開催している。

第 1 回勉強会は 9 月 20 日に開催し，「江戸町会所の性格と機能について」（『近世巨大都市の社会構造』1991，東京大学出版会）をとりあげ，久角健二氏が報告した。この時，ラウンドテーブル当日の内容について話し合いをおこない，上記のような形で開催する方向をとることを決定した。10 月 8 日に開催した第 2 回勉強会では三田智子氏が「巨大都市における身分と職分」（『近世巨大都市の身分構造』1998，東京大学出版会）について報告した。11 月 5 日に開催した第 3 回勉強会では山崎が「近世都市民衆の歴史的位相――浅草寺地域を中心に」（『巨大城下町江戸の分節構造』2000，山川出版社）をとりあげ，報告した。

今後ラウンドテーブルに向けて各自の研究に関連する吉田氏の論文をとりあげ検討する勉強会を引き続きおこなっていく予定である。また，吉田氏を招いてのラウンドテーブルは 2009 年 1 月末～ 2 月初に開催する予定である。

11. 白井順「東アジアにおける薛瑄『讀書録』の読まれ方」

薛瑄は，宋代理学を継承し，明代理学の正統として最初に従祀された人物である。彼の代表作『讀書録』は，明・清時代を通じて広く読まれ，朝鮮や日本でも出版された。このように『讀書録』は，明代思想史を考察する上で見過ごせない書物であるにもかかわらず，この書がどのように読まれたのかという研究はほとんどない。

まず基礎的な書誌的整理をするため，明代に出版された『讀書録』を，①閻禹錫本（成化 2 年）②鄭維新本（正徳 15 年）③張珩本（嘉靖 4 年）④侯鶴齢本（萬暦 24 年）の四種に大別した。現在，中国と日本で最も一般的な『讀書録』11 巻『讀書續録』12 巻は③の系統であるが，朝鮮では②の系統が権威ある版本として朝鮮本が出されていた。①と④は，テーマ毎に薛瑄の言葉を分類した版本だが，両書の分類方法は異なり，同じ「道体」というテーマでも内容が全く違う。『讀書録』は明清時代を通して，再編集されたり簡略化されたりして多様なバージョンで読まれる。『讀書録』は，薛瑄自身がどの本のどの箇所を読んで書いた言葉なのか記していない限り，実際にはどの書のどの箇所を読んで思った言葉なのか正確には分からないし，しかも口語の肉声を記録した「語録」ではなく，文言で書かれている。このように本来「読書ノート」であったものが，このように『讀書録』は先生が弟子に語った口語の肉声ではないにもかかわらず「語録」という形で捉え始めたことが題名にはっきり示されるのは，嘉靖年間に入ってからである。例えば『諸儒理学語要』･『大儒心学語録』といった思想的風合いが異なる人物の言葉を寄せ集めた中に，『讀書録』からの引用にもかかわらず，「薛敬軒先生語録」･「文清薛先生語要」と題している。

何種もの版本と平行して，嘉靖年間になると，簡略版がそのまま『讀書録』の通称で通行するようになった。『讀書録』の簡略版は，弘治 14 年に呉廷挙が編んだ『薛子粋言』（讀書録要語）に始まり，正徳 16 年にこれを校訂して出版したのが，胡纘宗『讀書録要語三巻』である。嘉靖年間には，これがそっくりそのままの形で『薛公讀書録 1 巻』として叢書に収録され，万暦年間になると『皇明経世実用編』という公の出版物でも『讀書録要語』が『讀書録』の代わりとして収録されている。

胡纘宗は更に『讀書録』の中から官職にあるものに有益な日常に密着した言葉を選んで『従政名言』を出版した。嘉靖 43 年（1564）に，谷中虚は『薛文清公要語内外篇』を出版したのだが，内篇が『讀書録要語』の抄録で，外篇は『従政名言』を抄録したものである。この書は萬暦年間には何度も刊行され，清代には満語にも翻訳されて読み継がれていった。これと平行して，『従政名言』も独立した薛瑄の著作として簡略化されて叢書に収録されるようになっていった。

朝鮮では，平易で切実な朱子学の範疇内に収まる言

葉であったからこそ，朱子を継ぐ者として薛瑄『讀書録』は，李滉をはじめ，高く評価されている。朝鮮では，楊廉が従祀を上奏した際に，編まれた②の鄭維新の版本が完全版の底本として使われ，1656 年に洪柱世が重刻するのだが，序文によれば，家にあったのは『讀書録要語』で，『讀書録』を見たことがなかったと言っている。李退渓の高弟で，彼とともに陶山書院に祀られる趙穆も「薛文清讀書録要語を愛む。竝らべて與二冊諸を案上に置く」と述べ，朱子大全とともに『讀書録要語』を愛読したことが記されている。趙穆の門下とも言うべき鄭逑は，壬辰の倭乱で焼けてしまった『讀書録要語』を萬暦 35 年（1607）に再版するに当たって，自ら選んだ『續選』を『讀書録要語』の後ろに追加して出版した。その後，この『續選』が附された『讀書録要語』は，李退渓の学問系統・嶺南派では，日常に即した基礎的な書物として読まれたようだ。1636 年の通信史の副史として日本へも来たことがある金世濂（1593-1646）は，1642 年に『續選』を追加したこの『讀書録要語』を重刊したが，彼の文集には壬申の倭乱の後，性理学の書が少なく，『近思録』や『小学』とともに，『讀書録』を地方に送って出版させ，毎月講誦させるべきだと言っているのだが，その理由として，国家の危機に際して理学の基本的なものこそが大切だと言う。

もともと，『讀書録』は二十巻あまりの大部な書物なのだが，『讀書録要語』は三巻だけなので，中国のように簡略版が作られることはなく，そのままの形で読まれ，そのことが却って一般には『讀書録要語』が通称『讀書録』として流布していくことになった。『芝峰類説』でしられる李睟光（1563-1628）は，讀書録の注解である『讀書録解』を書き，61 条について解釈を記しているが，基づいている版本は『讀書録要語』である。

日本では，③張珩の系統で，萬暦年間に出版された李滉に基づく和刻本が流布している。日本では，中国のように簡略版が作られることもなかったし，『讀書録要語』が読まれた形跡もない。しかし和刻本特有の点は，『薛文清公策目一巻』が附してあるところである。『薛文清公策目』は，五十八の口頭試問集であり，薛瑄の八代目の孫裔，薛士弘が萬暦年間に家蔵の「年譜」などとともに出版したものである。中国でも，朝鮮でも，『薛文清公策目一巻』が付録された『讀書録』はなく，偽作ではないかと疑われたものの，閻禹錫『分類讀書録』を根拠に本物だと判断されたようだ。

『四名公語録』は，朱子・陸象山・王陽明の三氏の語録抄本と合わせて，『宋明四先生語録』として出版されたもので，呉勉学の序には萬暦 31 年（1603）の刊記があるものの，底本は，中国・台湾・韓国にも見つからず，和刻本以外にその姿は分からない。寛文 10 年（1670），11 年（1671），延宝 3 年（1675），天和元年（1681），元禄 5 年（1692）元禄 12 年（1699），と何度も出版され，よく読まれていたことが窺え，これも日本特有の『讀書録』受容の様相であると思われる。

また，江戸末期の寛政の異学の禁のとき，政治にたずさわる者の実用書として最初の官板の刊行物九種類の一つに『薛文清公従政名言』は含まれている。寛文九年（1669）に和刻され，その後幾度も官刻され，その後も藩校で使用されるなど，民間でも出版され『従政名言』だけ特化して広まっているというのが，日本の薛瑄の受容の特異な点と言える。日本では，朝鮮儒学の影響を受けた山崎闇齋や佐藤直方・浅見絅齋が，『讀書録』を仁の真意を得たものと称賛しただけでなく，柳川藩儒の安東省庵や熊本の横井小楠も薛瑄を高く評価したが，『従政名言』に関する言及はない。このことから日本では『讀書録』と『従政名言』は，完全に別なものとして受け止められていたことが窺える。

以上，主として書誌的観点から『讀書録』の刊行様態と読まれ方を整理してみた。なぜこれほどまでに，『讀書録』は読まれたのか，この問題を解明するためには，各種の版本が刊行された時代背景と思想状況を精査する必要があり，現段階では，『讀書録』と通称されるものの全体図を描くという基礎的な作業を主としたもので，今後さらに思想的な検証を進める必要があると考えている。

以上のことを 2008 年 10 月 12 日京都大学で開催された第 60 回日本中国学会で口頭発表した。

12. 中嶋晋平「戦間期における地域社会とマス・メディアの軍縮言説の構造――『呉新聞』の内容分析を事例に――」

1920 年代のいわゆるデモクラシー期と呼ばれる時代は，近代日本において唯一軍部や軍隊が公然と社会的な批判の対象となった時期であり，軍に対する批判やさまざまな議論がなされるなかで最も大きな盛り上がりを見せたのが，軍縮を求める輿論であった。これは軍縮問題が，軍事費の削減に伴う国民の財政的負担の軽減，国際関係の改善，軍閥の政治的影響力の排除といったさまざまな問題と密接に関連する極めて重要な政治問題であったためであるが，こうした国民の軍縮輿論の形成に大きな役割を果したのが，大正期以降急速な発展を遂げた新聞であった。このことは，陸軍省や外務省などが新聞の紙面を収集・分析することで輿論の動向を把握しようと努めていたことからもうかがい知ることができる。そこで私は，軍縮問題をてがかりに新聞の内容分析を行うことで，デモクラシー期における軍とマス・メディアとの関係，そして軍と社会との関係について明らかにしたいと考えるに至った。

そこで本研究は 1920 年代から満州事変が勃発した

1931 年までを対象に，軍縮問題を事例として多元的な新聞の軍に関する言説を比較検討するものである。上述したように，当時軍縮の実現は極めて重要な問題であったが，それは単に国家の政治的問題というだけではなかった。例えば師団や連隊がある地域社会，もしくは軍港や工廠が存在する地域社会というように，ある程度軍に地域経済を依存している社会では，軍縮問題の推移の過程が直接的に地域の政治・経済に多大な影響を与えることが懸念された。このためこれらの地域社会にある地方紙は，中央紙など他の地域の新聞とは異なった社会的背景をもとに軍縮問題を報じ，意味づけを行っていったと考えられる。このように軍縮問題は，国際問題や経済問題に対する強調度，軍に対する報道姿勢など，地域によって新聞の言説にも大きな違いがあり，それが戦前・戦中期の地域の民衆の意識形成に異なった影響を与えていたと考えられるのである。

以上のことから，新聞の内容分析から軍と社会との関係を考察するためには，中央紙だけではなくさまざまな地方の新聞についても取り上げ，多元的に分析する必要がある。そしてそれらの連関を図ることで，当時の軍に対するマス・メディアの言説を包括的に捉えていくことが本研究の目的である。またそうした言説のあり方が，地域に住む人々の意識や行動にどのような影響を与えていたのかについても考察する。

現在までの進捗状況

①予備調査――対象地域・対象紙の設定――

近年，地域社会と軍隊の関係について関心が高まっているが，陸軍に比べ海軍と地域社会との関係についての研究はほとんど行われていない状況にある。また当時，国際的には海軍の軍縮問題の方に重点が置かれていたということから，本研究では海軍との結びつきの強い地域の地方紙を取り上げ，地域社会と軍との関係について考察していく。

まず対象としては，海軍に対する依存度の高い地域として，1920 年代に鎮守府が存在した府県を候補地として選んだ。すなわち，神奈川県（横須賀），京都府（舞鶴），広島県（呉），長崎県（佐世保）の 4 地域である。このなかから，⑴当時の地方紙の発行状況と現在の残存状況，⑵軍縮問題に伴う政治的・経済的・歴史的特徴，⑶継続的な資料調査の可能性，という観点から地域を選定した。

この結果，京都府（舞鶴），広島県（呉）の 2 地域に限定した。このうち，東京や大阪といった，大正期以降全国紙として発展していく新聞の発行地から遠いこと，また鎮守府が置かれていた呉市を発行地域としていた『呉新聞』が利用可能という資料的特徴から，広島県（呉）を第 1 候補とした。また継続的な調査が容易であることと，ワシントン海軍軍縮条約の煽りを受けて 1923（大正 12）年に舞鶴鎮守府が廃止され要港部に格下げされるなど，軍縮問題と関連して他の地域には無い特徴をもつ京都府（舞鶴）を第 2 候補とした。

そして予備調査として，それぞれの地域で発行されていた『呉新聞』（頒布地域は主に呉市）と『京都日出新聞』（頒布地域は主に京都府・滋賀県）について数回の資料調査を実施した。

また除外した 2 地域については，長崎県（佐世保）は継続的な資料調査が容易ではなく，調査・分析に多大な日数を要すると判断したため除外した。また，神奈川県（横須賀）は長崎県（佐世保）と同様の理由に加え，横須賀市を頒布地域としていた新聞が現存していないことなどの理由から除外することにした。

②予備調査の結果

まず数回の予備調査の結果として，広島県（呉）の地方紙を取り上げることは困難であると判断した。その理由としては，まず中心資料として考えていた『呉新聞』の内容の問題があげられる。確かに『呉新聞』には，当時の呉市の状況が細かく取り上げられてはいるものの，元々は当時中国地域を中心に発行されていた『中国新聞』の付録として発行されていたということが端的に示しているように，『中国新聞』の併読紙としての性格が色濃いものであった。そのため，軍縮問題といった地方の枠に止まらない問題は，報道記事も論説記事も主として『中国新聞』で取り扱われ，『呉新聞』では補足的に地域の記事が掲載される程度に止まっていた。

その結果，広島県（呉）を対象に新聞の内容分析から地域と軍との関係を考察するためには，『呉新聞』と『中国新聞』の両紙を併せて分析する必要が生じた。このことは調査量の倍増を意味し，現在の自身の研究環境では所定の期間で調査結果を示すことが難しいと判断したため，調査対象から除外せざるを得ないという結論に達した。

したがって予備調査の結果，京都府で発行されていた『京都日出新聞』を対象に分析を進めていくことにした。

③内容分析

現在は，1921 年初頭からの『京都日出新聞』の軍縮に関する記事を収集・分析している。1921 年には，ワシントン会議において日・英・米・仏・伊の 5 カ国の間で海軍軍縮条約が成立しているが，会議開催が決定するまでの時期にはその実現可能性が，また開催が確定的となったあとはその議事内容に関して，政治家や実業家，各新聞などが賛否両論の活発な主張や議論を行っていた。そのため，1920 年代以降における『京都日出新聞』の軍縮問題に対する解釈や意味づけ，受け手に対する提示の方法とそれによって構築されるイ

メージを分析するためには，最初に軍縮問題に対する報道や主張を行った1921年に注目する必要がある。そこでまず『京都日出新聞』の軍縮問題に対する姿勢や，それを受け手にどのような形で提示しているかを，ワシントン会議が開かれていた1921，22年を中心に内容分析から明らかにしていく。また比較のため，『大阪毎日新聞』についても同時期の軍縮関連の記事を収集・分析中である。

④先行研究の整理

地域メディア論･マス･コミュニケーション論･ジャーナリズム論等を参考にして，当時の地方新聞に対する見方や位置づけなどを取り入れながら，調査資料を分析・考察する際の理論的枠組みを構築している。また戦前期の地方紙を取り扱っている先行研究についても収集・整理を行っているところである。